最強のヒロイン（自称）

げこくじょー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒロインに転生した以上、最強を目指すしかないのでは？（真理）

目次

序章で終章 ―― 1
主人公⇔？ヒロイン ―― 34
幼馴染と幼馴染 ―― 67
逆転↓進展 ―― 87
最強は最恐で最凶 ―― 111
超人≠化物 ―― 129

序章で終章

「ずっと前から好きだったんだよ！」

愛を叫んだ男子の表情は真剣というより半ばヤケクソじみていた。元々整った顔立ちをしているだけに普段見せないその表情は当人の心境を如実に表していた。しかし、イケメンは何をやっても許されると言うが、多分それは違うのだと感じた。正しくはイケメンは何をやっても決まるだ。全部成功するんだから許すも許さないもない。

イケメンの話はさておき。

告白された当事者。つまりは私。

全く予期していなかった。降って湧いたような告白に面をくらい、大和撫子にあるまじき間抜け面を晒したに違いない私。

どうしてこうなったのだろう。

心当たりはありありありアリーヴェデルチな私は過去を少しばかり振り返ることにした。

突然だが、メインヒロインとは本来約束された勝者であると俺は思っている、

物語上重要な役割を持っていたり、「メインヒロインに関する何か」が主人公の目的であったり、割と早い段階から最後まで主人公の傍にいたり（ただし例外としてサブに同居人や幼馴染がいる場合もある）、最終的には主人公と引っ付く。作者によってヒロインの勝者として扱われるべき存在である。

本来は。

昨今……というか、かなり以前からその約束されたはずの勝者であるメインヒロインはそうではなくなっていた。

いや、大部分は結果的に勝者となっている。

ただ、物語全てを通してみれば、なんと酷いことか。

サブヒロインの方が性格が良く設定されていたり、主人公との絡みが多かったり、挙げ句の果てにはメインヒロインを敗者に追い込むサブヒロインまで現れる始末。終いにはメインヒロイン（笑）だのと言われるものさえいる。視聴者や読者にもいらない子扱いされる可哀想な子もいる。

これは由々しき事態だ。

メインとは一体なんなのか、サブヒロインより大事にしろとまでは言わないが、ぞん

ざいな扱いをするのは断じて許されない。後、個人的には主人公にはメインヒロインとくっついてほしい。個人的な意見だが。

ともかく、メインヒロインなんだからメインヒロインらしい扱いにしてほしい……と常々思っていた。はい、ここ重要。思っていたということは、あくまでも一個人の意見なのだ。

つまり俺が言いたいのは――

――誰もメインヒロインになりたいとは言っていないということだ。

俺はテンプレ的神様転生を果たした。

神様には会ったし、死因も事故死。神様のミスなどではなかったものの、まあテンプレだと思う。

テンプレでないとしたら、なんの能力もくれなかったこと。あ、いや。能力はくれなかったけど申し訳程度に身体能力だけ上げてくれた。記憶もそのまま。並大抵の世界ならこれで無双とは行かずとも悠々自適に暮らしていくことができる。

転生者として意識がはっきりしたのは五歳になって半年以上経った頃だ。でないと

脳が耐えられないと神様に言われたこともその時思い出した。たった二十年程度でも一気に思い出すとなるとそこそこ脳に負担がかかるらしい。

で、五歳にして人生イージーモードになった俺だが、一つどうしようもない問題があった。

――我、女児ニ転生セリ。

転生したのは良かった。身体能力が向上し、記憶も引き継ぎ。チート能力もらって『俺ＴＵＥＥＥＥ！』も夢見たが、それは今の状態でも十分出来たのであまり未練はなかった。寧ろ、第二の生を充実させていただきありがとうございますとさえ言いたかった。

なのに、これは如何なものか。

最後の一つの前世と同じ性で転生するというある意味転生において最も重要なことが出来ていないのか。

ひょっとしたらランダムなのかもしれない、と思いかけたが自分の名前を見てそんな考えも吹き飛んだ。

『篠ノ之箒』

ライトノベル、インフィニット・ストラトスことＩＳのヒロインであり、主人公の幼馴染み。ＩＳの生みの親である篠ノ之束姉を持つため、重要人物保護プログラムの対象

になり、小学四年生から日本各地を転々、一家離散になるわ、姉が失踪してからさらに執拗な監視と聴取を繰り返され、心身ともに負担を受け続ける羽目に。そのせいか、精神面がやや不安定で、ＩＳに関しても最初は政府によって無理矢理入学させられただけで成績も決して良くはなかった。しかも昔から人付き合いが苦手で友達作るのが苦手。コンプレックスつけすぎじゃね？と思うほどに。これで貧乳だったら作者の性格が歪んでいるとさえ思う。あ、もちろん良いところもあるよ。努力家だし、ワールドパージの時は一人だけ偽物の主人公を自分の意志で消すメインヒロインの強さを見せつけたんだから。

さて、大まかに説明するとこうなるわけだが、それは別にどうでもいい。

俺が言いたいのは一つ。

メインヒロインじゃねえかよぉぉぉおおお!!?!?

絶対狙ってやっただろ、これ!?あれか!?転生前にメインヒロインの在り方について語……ってないな、そんなに。ちょっと愚痴っぽく言っただけだな。でも、それぐらいしか思いつかないんですけど！

『メインヒロインの扱いに不満がある……つまりメインヒロインになれば自分で動かせるから解決するのでは？』みたいになってんじゃんかよ！完全に逝っちゃってる人の思考じゃん！それならせめてメインヒロインをサポートできる立場にしてよ！兄とか弟

とか！本人にしてどうするよ!?目下最大の障害が自分の前世が男だったことじゃん!?

……と、まあこんな風に混乱した。当然の事ながら。

だが、そんな混乱も十年も経てばある程度は落ち着く……というか、どう足掻いても自立するまで性別を戻すこともできなければ、篠ノ之箒という立場上、そんなことも出来ないことを受け入れなければならなかった。そこ、諦めただけとか言わない。

冷静になった俺は考えた。

これからどう足掻いても篠ノ之家は一家離散。高校はＩＳ学園行きは確定だ。それを回避するためには篠ノ之束にＩＳを作らせないようにしなければならないし、そんなの無理。いくら篠ノ之束がシスコンでもそんなお願い聞いちゃくれないし、絶対怪しまれる。

何より、俺はＩＳに乗りたい。

仕方ないよ、ロボット（パワードスーツだけど）は男の子のロマンだもの。

そんなわけで阻止できないしする気もない以上、大体は原作通りになるだろう。

――そう。篠ノ之箒以外は！

俺という人間がなったからには篠ノ之箒もまた原作とは変わった人間になる。

どれだけ似せたところで完全に一致させることは不可能だ。

だから俺は考えた。

だったら理想のメインヒロイン篠ノ之箒になればいいじゃない、と。

ＩＳヒロイン不動の人気を誇るシャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィッヒを凌駕するほどのヒロイン力を身につけて、メインヒロイン（笑）の汚名を返上する！

目標を決めてから俺の行動は早かった。というか、他に目標らしいものもなかった。

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花。大和撫子の体現者となるべく努力した。もちろん、篠ノ之箒成分は必須なので髪型はポニーテール。口調は女子というより男子よりの固めの口調。特技は剣道だ。

元が男だし、何度も面倒くさいとか、中身男だしボーイッシュ路線で行ってみるかなどと迷ったりもしたが、それらを乗り越えて俺――否、私はついに『メインヒロインの座に相応しい篠ノ之箒』になった。

――までは良かった。

目標を達成し、政府からのお達しでＩＳ学園へと入学。
晴れてあの息苦しい生活からも解放されて、ひと時の自由を手にした。いくら覚悟していたとはいえ、あの生活は本当に息が詰まりそうだった。そりゃ、原作の箒も精神不安定になるし、原因の束を嫌うわけだ。
さて、ここからいよいよ原作が始まるな。
女にも随分慣れて男だった頃の感覚はもはや知識レベルにまで薄れている。女の裸を見ても、なにも感じないし、当然欲情もしない。ここまでくれば正真正銘の女性といっても過言はないはずだ。これからはメインヒロインらしい立ち振る舞いを見せ、見事主人公こと織斑一夏とゴールインを……。
……待て。ゴールインしたらマズくない？メインヒロインとして主人公とゴールインするのは最高のエンディングだけど、ゴールインするってことはつまり幸せな家庭を築いちゃうことだよね？それってつまり未来を作る行為（意味深）をするということでは？
「……何をやっているんだ、私は……」
「え？」
「あ、いや……んんっ。なんでもない。忘れ物を思い出しただけだ」
それとなく誤魔化したものの、やはり溜め息が出る。

ここまで大和撫子を目指すために色々頑張ってきたが、その後の事を一回も考えていなかったのは最大のミスだ。

……いや、厳密には考えていなかったわけではなく、最強のメインヒロインになるということは即ち主人公と結ばれるということ、そこまで考えてはいた。ただ、それが最終的には子づく……子孫繁栄に繋がるということを失念していたなんて……これもゴルゴムの乾巧ってやつが変身するディケイドの仕業に違いない。

冗談はともかく、本当にどうしよう。

ここまで来てヒロインの座をぶん投げるわけにもいかない。そうするということはこの十年と少しの時間を全否定するということになるからだ。流石に並大抵の努力でなかったことを考えると捨てることなんてできない。

しかし、この努力が実を結ぶということは主人公と結ばれるということ、仮に他の男が相手だとしても行き着く先は同じなのだ。

いくら自己意識もほぼ女になっているとはいえ、はたして男を相手にそんなことができるのか。もちろん、女寄りの意識なので女より男の方がマシかもしれないが……ダメだ。何も思いつかないや、あはは（トオイメ）

現実逃避しているとパアン！と弾けるような打撃音が届いた。

「げえっ、関羽?!」

追い討ちをかけるように打撃音が教室に響き、女子が若干引いていた。
かくいう私も知らない仲ではないのに引いている。だってあれめちゃくちゃ痛そうなんだもん。
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」
ややトーン低めの声。一見すると苛立っているようにも見えるが、私は知っている。久々に弟に会ったもんだから、ちょっと嬉しいのを隠すために意図的に声のトーンを――。
ヒュン、という風切り音とともに出席簿が顔の横を通過し……た……。
「次は当てるぞ」
「は、はい……」
相変わらず自分の事に対して敏感すぎませんか、この人。
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことはよく聞け。いいな」
凄まじい暴力発言。
けれども、教室内には困惑のざわめきはなく、黄色い声援が響く。

それを千冬さんは鬱陶しそうな顔で見ていた。うん、あれは本気で鬱陶しがっている。

「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。逆に感心させられる。それとも、私のクラスに集中させているのか？」

織斑千冬といえばＩＳ界隈では超がつくほどの有名人。サッカーでいえばその年のワールドカップＭＶＰ選手がコーチとしているようなもの。こう言う反応になるのは当然だし、このクラスに限った話ではない。

その後も姉弟漫才を挟みながらもＳＨＲは進んでいき、チャイムが鳴り、ＳＨＲが終わった。

締めの言葉もなかなかの鬼教官ぶりだった。例に漏れず好評だったけど。

さて一時間目まで十分の休憩があるわけだが、どうすべきか。

ヒロインとして、幼馴染みとして、ここは孤立無援の主人公――織斑一夏に話しかけるか、はたまた互いに牽制し合っている女子達に話しかけて友好関係を築いていくべきか。

前者を選べば『流石メインヒロイン箒ちゃん、サイコー！』となるわけだが、他の女子からしてみれば印象があまりよろしくない。全員が全員抜け駆けするなよオーラを放っているわけだから。対して後者は簡単だ。このＩＳ学園はハイパーエリート校。

同中とか幼馴染みとかいうのはかなりレアだと中学で出来た数少ない友達から聞いた。ただし、後者の場合は一夏を見捨てる事になる。ヒロイン力が下がるだろう。

むぅ……悩ましい。どちらを選んでも修羅の道だ。

メインヒロインという役目を蔑ろにしたくないが、かといってその為なら他のことはどうでもいいわけではない。いや、出来ることなら学生生活は充実したものにしたい。これでも頑張って小学四年生後半から中学卒業まで学生生活を充実させる努力はしてきたんだから。ここからは原作だからぶん投げてもいいわけじゃない。個人的に。

どちらを選ぶべきかと考えていると教室のざわめきが増した。

何事かと思い、顔を上げてみれば――。

「篠ノ之箒……だよな？」

――そこには主人公（織斑一夏）がいた。

ゑ？なに？強制Ａルート突入？選択系と見せかけてどちらを選んでも同じ答えに行きつく類のものだったか……面妖な。

と、ふざけてる場合じゃなかった。強制なら仕方ない。後で私も質問攻めの嵐に晒されるだろうが、抜け駆けしたとは思われないだろう。

「……あれ？もしかして違った、か？だとしたら――」

「いや、合っているぞ。お前の知っている篠ノ之箒だ」

「やっぱりそうか！最後に会ったのが小四だけど、箒だってすぐわかったぜ！」
私の手を取り、テンション高めで言う一夏。
気持ちは大いにわかるが、周囲からの視線が痛い。いや、メインヒロインとしてはポイント高いんですけどね？ちょーっとボディタッチするのは早くないですかね？まあ、これしきでは動じませんけどね？なにせ、元男かつあの過酷な環境を乗り越えた鋼のメンタル（自称）の持ち主だから。
「そうか？そう言われると私も髪型をずっと同じにしていた甲斐があったぞ」
「？何言ってるんだ？髪型が変わっても、俺が箒を見間違えるわけないだろ」
そうだろうそうだろう。やはり髪型が……関係ない？
あ、あれ？おかしいな。確か原作だと髪型が同じだからわかったって言ってたのに。
……ま、まあ、そういうこともあるな。うん。
「そういえば去年剣道の大会で優勝したんだよな。ちょっと遅いかもしれないけどおめでとう」
「それぐらいしか取り柄がない女だからな。私は」
大和撫子は謙虚であるべし。自分の実力を鼻にかけてはならないのだ。
正直な話をすれば、褒めてもらって嬉しくないわけはないし、全国優勝した時は叫びたい衝動に駆られたものだ。自分の作ってきたイメージを壊すからやめたけどね。

「そんなことないぞ。箒は昔から何だって出来たじゃないか。ほら、俺も昔はいろいろ箒に教わってただろ？箒からしてみれば大したことじゃないかもしれないけどさ。俺はすごいことだって思ってるぞ」

『謙虚だなぁ、箒は。ははは』ぐらい軽く流してもらえると思っていたらものすごい真剣な表情で返された。いや、確かに仲良くなってから勉強や家事を偶に教えることもあったけどね。それこそ私が教えなくても原作じゃ今頃普通に専業主夫クラスの実力を有してるからね、キミ。

後、顔が近い。

「あ、ああ。そう、だな……」

気まずくなり視線を逸らすと一夏も自分のしていることに気づいたのか、手を離して距離を置いた。

「わ、悪い。ちょっと熱くなった……」

「い、いや、大丈夫だ。その、なんだ。ちゃんと覚えてくれていて私も嬉しいぞ」

ここまでしっかり覚えてくれているのはヒロイン冥利につきるというもの。原作じゃ多少曖昧な部分もあっただけに今までの成果が如実に表れていると言えるだろう。こいつはすげえや、と言わざるを得ない。

「……」

ただ、この微妙な空気はどうすればいいんだろう。
思いっきり聞き耳を立てていた周囲の女子に視線をやれば『私達は何も知りませんよ？話？聞こえてませんなぁ』とでも言いたげに顔を逸らす始末。いや、目が合いましたよね？その言い訳は苦し過ぎません？
と、その時一時間目の開始を告げるチャイムが鳴った。
少しだけ距離を置いて包囲網を展開していた女子達も素早く席に戻ったり、クラスに帰っていく。
「じゃ、じゃあまた後でな。六年ぶりだし、積もる話もあるから」
そう言うと一夏は席に戻っていく。
積もる話もある、か……はて、織斑一夏ってあんなやつだったっけ。
久々に会う幼馴染みで、知り合いが私しかいないからというのもわかるけど、あんなやつじゃなかったような気がする。
……まあ、こういうこともあるか。私のような転生した人間がいるわけだし、ちょっとくらい性格も変わってくるだろう。
「痛っ」
うんうん、と頷いているとパシンと頭を叩かれた。
「考え事をするのは勝手だが授業中だ。せめてバレんようにしろ」

「……すみません。織斑先生」

少しだけ痛む頭をさすりながら、大人しく授業を受けることにした。

――思えばこの時から一夏の反応はおかしかったのかもしれないが、この時の私は『ラノベの主人公にありがちな思わせぶり言動』だと高を括っていた。

二時間目が終わり、クラス代表を決める話し合いでも原作通り一悶着起きた。

ただ、ここでも一夏の対応はとても原作で子どもの口喧嘩じみたことをしていたとは思えないほどの大人の対応だった。

『そっちが俺のことをどうこういうのは勝手だ。ただ、それ以上言うんなら聞き流すわけにはいかないぜ』

この時の一夏の様子は声を荒げるでもなく、努めて冷静に、静かに声音に怒りを滲ませるもので、対応としては及第点だった。

満点じゃないのは、それが一夏を罵倒してきた相手――ＩＳのサブヒロインが一人。セシリア・オルコットだったことだ。

一夏の冷静な対応も彼女にとっては弱気な発言に聞こえたようでさらに拍車がかかった。

これは自分も当事者なら声を荒げて言い返すぞって感じた辺りでついに一夏が軽く言い返し、そこからはヒートアップして原作通り。違うとすればハンデ云々の話がなかったことぐらいだ。

一、二時間目も一夏は普通に授業について行っている様子だったし、原作より少ししっかりしている。まだ一夏の全部を見たわけじゃないからあくまでも少しだけと言うことにしておく。

学食でひとまず落ち着いて……と行きたいところだったが、一夏がいる以上そんなことができるわけもなく、当たり障りのない会話しかできなかった。まぁ、それでも一夏にとっては良かったらしい。

で、ようやく放課後になったわけだが、女子の動向は相変わらず。

いや、ちょっとだけ変わったかな。一夏と同じように私も注目されている。

私達が知己であるのは既に学園中に知れ渡っている……というか、普通に聞かれたので幼馴染みだと答えたら、あっと言う間に広まった。

「なんか日本に初めて来たパンダの気分だな」

「パンダよりはマシだろう。見世物という点ではそう変わらんがな」

「だな。ホントに箒がいてくれて助かったぜ。俺一人だったら今頃どうなってたか」
「大袈裟だな……と言いたいところだが、今は似たような立場だ。気持ちはわかるぞ」
　仮に自分が一夏と同じ立場で、頼る人間がいなかったとしたら気が滅入っていたに違いない。今の鋼のメンタル（自称）は重要人物保護プログラムによって培われたが、それとこれとは違うわけだし。
「あ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。良かったです」
　一夏を呼んだのは女子の包囲網をかき分けて現れた副担任の山田先生だった。
「えーと、俺になにか？」
「えっとですね。寮の部屋が決まりました」
「寮の、部屋ですか？でも、前に聞いた話だと一週間は自宅から通学するって話だったと思うんですけど」
「自分の状況を考えてみろ、一夏。入学してすぐに行方不明者の一人として名を連ねたくはないだろう」
　ぶっちゃけた話、よくもまあＩＳが動かせると判明してからも普通に生活が出来たなと思う。普通ＩＳ学園に入るまでは私と同じような扱いを受けるところだ。
「それは言い過ぎな気もしますけど……事情が事情なだけに一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したみたいですね」

その辺りから山田先生が一夏に耳打ちをしたので何を言っているかは聞き取れなくなった。内容は大体わかるけど。

政府がどうのこうのって話だろう。この辺りの重要じゃない話はうろ覚えだけど。

「部屋割りのことはわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないんで、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配しておいてやったぞ。ありがたく思え。生活必需品と着替え、携帯電話の充電器があればいいだろう」

疑問形じゃなく、確定系なんですね、千冬さん。

「ど、どうもありがとうございます……」

引きつった笑みを浮かべて一夏は心にもない感謝を述べる。

気持ちはわかる。そりゃ仕事人間みたいなやつはそれで大丈夫だろうけど、普通の人間には日々の潤いも必要だ。かくいう私もアプリゲームから手を離さないのが現状です。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時。寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんは今のところ使

えません」
「え、なんでですか？」
　ずっこけかけた。
　原作に比べると幾分理性的になったかと思っていたが、どうやら天然なのは生まれつきらしい。鈍感な上に天然だから女子の告白にも気づかないわけだ。
「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」
「あー……」
　失言だったと言葉を濁す一夏。
　と、その時、気まずそうな表情を浮かべながら、一夏がチラリとこちらを見た。
「？なんだ？」
「い、いや、なんでもない」
　自分がセクハラ紛いの発言をしたことを気にしているんだろうか。別にこの程度は全く気にしないけど。
「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか!?だっ、ダメですよ！」
「わ、わかってます！さっきのは失言ですから！ちょっとした勘違いです！」
「そ、それならいいんです。女の子に興味がある年頃だとは思いますけど、教師として不純な行為は見過ごせませんから」

一夏は失言に慌てふためく山田先生もなんとか宥める。一人で炎上するタイプの人を宥めるのって結構苦労するよね。

「はぁ……とりあえず途中までだけど寮に行こうぜ、箒。俺早くこの視線から解放されたいよ」

「ああ」

十中八九、途中までじゃないだろうけどね。

そんなことを思いながら、一夏と共に教室を出た。

よくよく考えたら、この時も一夏の言動には不審な点がいくつか見られたのに、私は気づいていなかった。

「えーと……１０２５号室っと、ここだ」

一夏は鍵プレートの番号と見比べて頷く。
「これでようやく落ち着けそうだな？」
「ああ。流石に部屋の中まで入って来ないだろうしな」
実際、一定の距離を保ちつつ後ろからついてきていた女子の集団も一夏の部屋を確認すると、各々割り当てられた部屋へと向かった。流石に一夏が部屋に入った途端、扉に張り付いて聞き耳を立てる、なんてことはしない……はずだ。それは私も困る。
「では、入るか。一夏」
「おう。……え？」
一夏と違い、既に渡されていた部屋の鍵を取り出して、鍵穴に刺して回すとカチャリという音が聞こえた。
何を隠そう……というか、隠してもいなかったが、原作通り一夏のルームメイトは私なのだ。まぁ、千冬さんなりに一夏に気を遣ったということだろう。あの人のブラコンぶりを考慮すれば十分あり得る話だ。私情を抜きにしても、知っている人間と同室にするのは妥当な判断ではある。
あくまで個室が用意できなかったという前提条件がある場合だ。
部屋に入って中をぐるりと見回す。
やはり凄いの一言に尽きる。

いくら国からの全面的な支援があるとはいえ、お金をかけ過ぎではないだろうか。使える身としてはありがたいことだが。
「さて、共同生活を始めるにあたっての線引きを……一夏？」
振り向くと一夏はまだ部屋の前で立っていた。
「一夏？入らないのか？」
「え、いや……ここって、俺の部屋、だよな？」
「今しがた確認したばかりではないか」
「じ、じゃあ、なんて箒が……」
「ここの寮は二人一部屋でな。ここは私の部屋でもある。つまりお前のルームメイト、というわけだ」
「は……はぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
一夏の絶叫が廊下に木霊する。
驚いたにしても、オーバーリアクションに過ぎるその叫びにはさしもの私も顔を顰めた。
「一夏っ。いくら防音対策がされているとはいえ、大声で叫ぶな」
「わ、悪い……じゃなくて！どういうことだ!?」
一夏は驚愕と焦燥をごちゃ混ぜにしたような変な表情でこちらに詰め寄って……く

る前にドアを閉めた。相変わらず、変なところで律儀なやつだ。
「二人一部屋？箒がルームメイト？何がどうなってるんだよ!?」
「ど、どうも何もそういうことだ。一学年に百人を優に超える生徒が三学年分。全員分の個室を用意していてはキリがないだろう」
「だとしても、俺は男だぞ!?同性同士ならともかく、箒は女子だから同じ部屋で暮らすのはいくらなんでもマズいだろ？」
「男子がお前しかいない以上、ルームメイトは女子になるし、そうなると私しかいない。お前の言い分もわかるが、納得しろ」
　まぁ、一夏としては周囲の目を気にしない時間が欲しいのはとてもわかる。いくら幼馴染みとはいえ、結局女だ。気心が知れた仲でも気を遣ってしまうだろう。
「そ、そりゃそうだけどさ……」
　一夏にしてはえらく食い下がる。はて、原作では箒の方がいちゃもんをつけていたからか、一夏がこの状況に文句を言っているのは違和感を感じる。いや、別に原作の一夏に常識がないというわけじゃなく。
　反応としてはこれが普通なのは間違いない……が、妙な引っ掛かりを感じた私はついつい聞いてしまったのだ。
「それとも何か？私がルームメイトでは不都合があるというのか？」

「……ある」

熟考の末、一夏は気まずそうに呟いた。

相手が女である時点で不都合がないわけはないのだが……それにしては随分気まずそうだ。

言いづらいことでもあるんだろうか……もしかして。

いや、十分に考えられる話だ。何故この考えが思いつかなかったのか。

「一夏。もしや、私が嫌いか？それとも苦手か？」

「……は？」

原作よりも良くなった『つもり』でいただけで、その実、良いどころか、悪くなっているということに……っ！

この可能性は大いにある。必ずしも、自分のヒロイン像が主人公にとってのヒロイン像と合致するとは限らない。否、もしかしたら正反対に位置するかもしれないのだ。

結果として、私は一夏と良い関係を築いていくどころか、敬遠される立場になろうとは。最初からあんなに詰め寄ってきたのは苦手を克服するためないし、幼馴染みに気を遣ったと言われれば納得もできる。とはいえ、さすがに同室になるのは無理、ということか。

まさかこれまでの努力が全て裏目にでるとは……今までの頑張りは一体なんだった

のか。ちょっと泣けてきた。
「それなら仕方あるまい。ただでさえ息苦しいこの学園で、私のような相手と共同生活をするというのは酷な話だろう。明日にでも寮長の先生に相談してくる」
　なるべく公私混同を避けている千冬さんといえど、この状況は望ましくないだろうから、話せばわかってくれるだろう。部屋割りはどうなるかわからないが、千冬さんならきっとなんとかしてくれる。
「私としてはお前がルームメイトで良かったと思っていたが……やむを得んな。私の都合だけでお前の学生生活を左右するわけには――」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！なんでそうなる!?」
　と、その時。一夏が私の言葉を遮るようにそう言った。
「む。なにかおかしなことでも言ったか？」
「おかしなことだらけだ！そもそも俺は箒のことが嫌いでも苦手でもない！箒との共同生活だって、ちょっと緊張感はあるかもしれないけど、別に気まずいとか息苦しいとかそういうのじゃないし、俺も……その、他のやつより箒がルームメイトの方が絶対に良い」
　そうか。嫌われてないのは良かった。
　……しかし、そうなると一つの疑問が生じる。

「では、何が問題だ？今までの話だとやはり私がルームメイトで最善ということになるぞ」
「そ、それは……」
一夏の目が泳ぎ始めた。
気まずいわけではないのだろうが、何かを隠しているのは明らかだ。
こういうことは突っ込まず待つ姿勢がヒロイン力の高さを物語る。
だがしかし。幼馴染みヒロインにとってそれは悪手！
待ちの姿勢を貫いた結果。負け犬の烙印を押されるのだ。
つまり、この場合は攻めの姿勢を見せるべきなのだ。守ったら負ける。攻めろ！
「らしくないぞ、一夏。言いたいことははっきりと言うべきだ」
「ぐっ……で、でも……こればっかりは」
「はぁ……そこまで私を信用できないのか。一夏」
「い、いや。信用できないとかそういうんじゃなくて……」
「だったら言ってくれ。私はお前の幼馴染みだぞ？私にぐらい多少気を遣わなくても問題はあるまい。というか、建前を言うくらいなら本音で話せ。そういうものだろう。私達の関係は」
今度はこちらが詰め寄ると、一夏は後ずさる。それを追いかけてさらに詰め寄る。

これを何度か繰り返していると、ついに一夏はドアを背負う形で足を止めた。これでもう逃げ場はない。

何も言わず、ただ無言で一夏を見つめる。

一夏は目を逸らすが、息苦しさだけは誤魔化しきれず、顔を青くしている。

そしてそれが一分ほど続いたところで一夏は絞り出すように声を出した。

「……好き、なんだよ」

「好き？なにが？」

「ああもう！だから！篠ノ之箒の事が！ずっと前から好きだったんだよ！」

「……へ？」

以上。過去回想終了。

半ばヤケクソじみた告白をした一夏。そしてそれを受けたのは紛れもなく私。何せ名指しで言われたんだから。流石に同姓同名の別人に対しての告白をこの状況でする

わけはない。さすがにそれは正気を疑う。
衝撃的な事実に思わず後ずさったのち、念のために一夏に問いかける。
「い、一夏。今のは……その、冗談、ではない、な？」
「……冗談でこんなこと言わないって。俺がそんなやつに見えるか？」
「み、見えない」
「はぁ……こういう空気になるってわかってたから言わないようにしてたんだよ……」
やってしまった、とでも言いたげな様子で一夏は頭をガシガシとかいた。
実際、この状況で告白するというのは一夏にとって悪手も悪手なのは事実。
断ってしまった場合、これからとても気まずい生活が始まってしまう。まだ初日だから周囲には気づかれないかもしれない（千冬さんを除く）が、自室に帰るたびに微妙な空気が流れ続けることになる。
「い、一応聞いておくが、いつ頃からだ？」
「……小学三年の春くらいから」
「キッカケは？」
「最初は純粋に憧れてたけど気づいたら……」
「……もしや、テストや剣道で私に勝負を挑んできたのは――」
「……ああ。勝ったら告白しようかと思ってた」

成る程。あの頃はてっきり一夏が負けず嫌いを拗らせていただけなのかと思っていた。負けん気が強かったし、私もまだ男としての意識が強く、年の近い弟の相手をしているような気分だった。

……そういえば。私が転校して参加できなかった剣道の大会。

あの時も『俺以外のやつに負けるなよ』とか言ってたな。ライバル同士が言うかっこいいやり取りかと思っていたが、あの時もそう言う意味だったのか。

「でも、言ったものはしょうがないしな。変に有耶無耶にしてもお互い気まずくなるだけだ」

今度は一夏がこちらに詰め寄ってくると、私の肩に手を置いた。

「箒。好きだ。俺と付き合ってくれ」

先程とは打って変わって真剣な眼差し、表情、声音。

告白する顔としては百二十点。イケメン効果でさらに威力はアップ。これは男寄りのメンタルの時でも『一夏なら良いか』と考えてしまうほどのキメ顔だ。そして女寄りのメンタルな私は不覚にも今のキメ顔でうっかりときめいた。べ、別に落とされたわけではないので間違えないように。

私は冷静に考える。

メインヒロインとしてこの状況は願ってもない状況だ。

現時点で他のヒロインはまだ舞台に上がっておらず、主人公に告白されているのはメインヒロインたる私のみ。厳密には後で登場予定のセカンド幼馴染とかいるが、それでも現在は事実上敵が存在しないこの状況下において、邪魔するものはいない。いるとすれば、それは私自身の心のみ。

インフィニット・ストラトスのメインヒロイン。篠ノ之箒として転生した時からどう在るべきかは決めていた。

しかし、私の中にはまだ男を受け入れる覚悟が足りていない。もしも、今強引ないし不意打ちでキスされようものならうっかりぶちのめしてしまうかもしれない。否、絶対ぶちのめす。

だが、それだけの理由で一夏からの好意を無下にすることなどできるはずもない。ゴールが目の前にあるのに自分からレースを棄権するなどバカの極みだ。そんなの意識高い系（笑）がすることだ。

ここでもし断って、気まずい関係になった挙句、ヒロイン競争からリタイアなんてことになってみろ。私のこれまでの生そのものが全否定されることになる。他のヒロインが凄かったのならまだ納得のしようもある。私の努力が足りなかったんだと。だが、仮に私自身がその引き金を引いたと言うのなら、おそらく死ぬほど後悔することになる。

えーと、つまりは受け入れるのも、断るのもなかなか難しいわけで。前門の虎、後門の狼的な感じで……。どちらを選んでもその先は地獄だぞ、みたいな……地獄は言い過ぎたな。

「箒」

真っ直ぐに見つめられて、視線を逸らすことができず、息を呑む。

だ、ダメだ。思考がまとまらないっ。この状況を打開する策どころか、時間稼ぎの言い訳さえも。

「まだダメか？」

「うぇっ?!ど、どうしてそうなる!?」

「いや、箒が困ってるみたいだしさ。もしかしたら幼馴染みのよしみで断り辛いだけなのかって……」

「ば、馬鹿を言うな。わ、私がそのような気を遣うものか。そ、それに……べ、別にダメというわけではなくてだな……」

「ダメじゃないなら……そ、そのＯＫってことでいいのか？」

「ダメじゃないなら……う、うむ？そうなる、な……？」

あまりにもテンパった挙句、頭の中が真っ白になった私は半ば条件反射でそう答えた。

瞬間、一夏の表情が明るくなった。喜色満面とでも言えばいいのか。何度も見てきた一夏の笑顔だが、今回はそれらとは比較にならないほど輝きを放っている。ガッツポーズまでしてる。

「これからよろしくな！箒！」

「こちらこそよろしく頼む……？」

ん？これってつまりそういうことなのか？

主人公⇔？ヒロイン

私、篠ノ之箒は考える。
どうしてこうなってしまったのか。
昨日。私は織斑一夏と数年ぶりの再会を果たした。
この世界において、最早確定事項であるそれに対して、驚くことはなかった。
最初だけ……否、最初からすでにおかしかった。
原作よりも距離感が近く、何故か髪型ではなく、見た瞬間にわかったと言い、謙遜すれば褒め殺してくる始末。
熱血漢というより、激情家という言葉の方が合っていた性格とは打って変わって年齢以上の落ち着きを身につけ、セシリアとの口論においても冷静に努めていた。この時も怒ることには怒ったものの、これに関しては一夏は十分に我慢したと褒めてあげたいところだ。
これらを踏まえ、当初は自分が篠ノ之箒に憑依した弊害で少し性格が変わったのかもしれない、と思う程度だった。
しかし、違った。

原作通りルームメイト同士となった私達だったが、ここで一夏がいちゃもんをつけた。

もちろん、いずれも正当性があるものだった。

にもかかわらず、原作との齟齬に違和感を感じて深入りしたのがマズかった。

一夏が私に隠していた気持ち――早い話が恋心を暴露させてしまった。

その事実に混乱している最中、覚悟を決めた一夏に勢いのまま押し切られ――

――交際することになりました。

こうして冷静に考えると、やはりこうなった原因の九割は私にあるように思える。残り一割は一夏がいちゃもんをつけたせいにしておこう。これぐらいの責任転嫁は許してほしい。

……と、とはいえだ。

事故でもなんでも私は一夏の好意を受け入れ、彼女となった。ゴール手前で足踏みしていたら、突如、突風が吹いてよろめきながらゴールテープを切った感じだが、ある意味ではこれで良かったのかもしれない。そう思うことにしよう。少なくとも、現状私の意思で最後の一歩を踏み出す勇気はなかったのだ。

「……ダメだな」

どうも昨日のことで竹刀を振る手に雑念が混じってしまう。普段通りにしているつ

もりでも、やはり自分を騙す事はできない。

「篠ノ之さん、大丈夫？」

「すみません。今日は少し調子が悪いようです」

どうやら様子が変だと思われたらしい。

流石に今の状況を部活動の先輩とはいえ、人に話す気にもならず、適当な理由をつけた。

「最初は環境の変化に戸惑って調子を崩すことってよくあることだから気にしないで」

「ありがとうございます」

先輩に一礼した後、竹刀と防具を片付け、更衣室に向かう。

剣道着から制服に着替える途中で、ふとロッカーに取り付けられている小さな鏡に目がいく。

そこに映っているのは当然私の顔。篠ノ之箒の顔だ。

中身が変わったことで色々なことが変わったし、変わる努力もした。もちろん、変わらないための努力も必要だったし、多少の誤差はあれど原作と遜色ないよう努めた。特に見た目は何より重要で、ある意味一番努力したと言っても過言ではないだろう。

そのおかげで一部の目立ちたがりに目をつけられた時もあったが、それが逆に容姿のレベルの高さを裏付ける結果となり、あまり苦ではなかった。

苦があったとすれば、行く先々の学校及び周辺他校の男子生徒に頻繁に告白されたことぐらいか。

元々、美少女の篠ノ之箒だ。原作のやさぐれをなくしてコミュニケーション能力を高めれば自ずとモテる。

転校して一週間程度経った頃ぐらいで男子達の告白競争が始まる。もちろん、眼中になかったので丁重に断った。

それもこれも全ては理想のメインヒロインであるため……だったのだが。

……既に惚れていたなんて。

「ま、まあ？　流石は篠ノ之箒。流石はメインヒロインだ。少々急だが、うむ。これで勝利は確定だな」

鏡に映った自分に賞賛を送る。

心なしか、顔が熱いし、赤くなっているように見えなくもないが、これはきっと運動をしたせいだろう。そうに違いない！

べ、別に告白してきた時の一夏の顔なんか思い出してないからなっ!?

なんとも皮肉なもので、本来楽ではないはずの授業をしている時が一夏や私にとって一番楽な時間だ。もちろん、精神的な意味合いで度合いも一夏の方が断然上だ。

……。いや、今しがた私も一夏に匹敵するだけの有名人になった。

――篠ノ之束。

ＩＳの生みの親にして、稀代の天才。そして私の――篠ノ之箒の姉。

原作と違い、私は姉さんに対し、恨みつらみを抱いてはいない。

私が一夏を好きではなかったこと、何が起こるかを知っていたこともあるだろう。苦労させられたことに変わりはないため、言いたいことがないわけではないが、それでも原作の箒に比べれば微々たるものだ。さっき授業が始まる前に質問責めにされたこともプラスして、せいぜい全身全霊の正拳突き一発ぐらいでいいレベル。

「まさか男ってだけで専用機まで渡されるとは思わなかったよ」

「特例措置というやつだろう。色々と例外だからな、お前は」
「なんか頑張ってる人に悪い気がするな。ただでさえ、ＩＳって少ないのに」
うーん……やはり一夏がＩＳ事情に詳しいととてつもない違和感がある。いや、バカな方がいいというわけではないのだが。
「ならば一層精進する他あるまい。特に来週の月曜にお前は――」
「――安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようなどとは考えていなかったでしょうけど」
私の言葉を遮って現れたのはイギリスの代表候補生セシリア・オルコットだった。
「まあ？　一応勝負は見えていますけど？流石にフェアではありませんものね」
「別に負けるつもりもないし、言い訳するつもりもないけどな。……でも、そっちの言う通り、これで条件は対等だ」
厳密には対等ではないが、ここでそれを私が言うのも野暮だろう。
一夏は現時点で原作よりも身体能力も知識も上だ。やる気も十分。勝てる可能性は十分にある。
「あら、昨日と違って威勢がいいですこと。そちらに篠ノ之博士の妹さんがいらっしゃるからですか？」
セシリアの言葉の矛先が私に向けられる。

成る程。そういう解釈もできなくはない。昨日、一夏は穏便に済ませようとした。だが、今日は戦う事が決まっているため強気に出た。その理由が私から……篠ノ之束の妹から協力が得られるから。

……そこまで強みになるとは思えないが……さしずめ天才の妹は天才という理論か。今まで色んな人間からそう思われてきた手前、さして気にもならないが。

「……待てよ。箒は箒だ。束さんは……姉は関係ないだろ」

……だが、気にならなかったのは私の方だけらしい。

怒気を孕んだ瞳で睨みつける一夏にセシリアが後ずさったが、それも無理はない。

さっきとはまるで別人だ。小学生の頃に一夏が怒っているのは何度も見たが、所詮は子どもだ。

ただ、今の一夏は違う。なんともいえない威圧感がある。そしてそれはどことなく千冬さんに似ている。

私が怒られているわけではないのに少しビクッとした。決して私が小心者なのではなく、千冬さんが怖すぎるだけなので悪しからず。

しかし、セシリアにも意地があるのか。さっきと同じように胸を張り、びしっと一夏を指差す。

「と、ともかく。あなたがどれだけ策を弄したとしても、わたくしの勝利は揺らぎません

わ！　せいぜい足掻いて下さいまし！」

そう言うとセシリアは踵を返して去っていった。

「悪いな、箒。俺のせいで」

申し訳なさそうに一夏は言うが、私は首を横に振る。

「一夏のせいではない。ああ思われても仕方のないことだ。事実、私は『篠ノ之束の妹』だからな」

少なくとも、私を知らない人間からすれば、第一印象がそうなってしまうのも無理はない。二世タレントやスポーツ選手がそう思われるのと同じことだ。

「けど――」

「だから私は親しい人間が『篠ノ之箒』を見てくれているならそれでいい。たとえ、大多数の人間が私を『篠ノ之束の妹』として見るとしてもな。簡単なことだ」

それこそ他人が色眼鏡で見てきたとしても、親しい間柄の人間が私を篠ノ之箒として認識し、接してくれているのであれば大して気にもならない。

「少なくとも今は……お前に、織斑一夏に『篠ノ之箒』として認識されているならそれでいい」

「……大丈夫だ。俺にとって箒は箒だ。束さんは関係ない」

「ならば良い。これでこの話は終わりだ」

「そうだな。……それじゃ、飯食いに行くか」
「うむ」

「ねえ。君って噂の子でしょ？」
食堂で昼食の日替わり定食を一夏と食べていると、不意に女子が一夏に話しかけた。
リボンの色が赤色――つまり三年生の女子だ。
「えーと、多分」
一夏がそう言うと、三年生の女子は自然な動きで隣の席に腰掛ける。
「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ほんと？」
「はい。成り行きで」
「でも君、素人だよね？　ＩＳ稼働時間いくつくらい？」

「……二十分くらい、と思いますけど」
「それじゃあ無理よ。ＩＳって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？　だったら軽く三百時間はやってるわよ」
「まぁ、そうですよね」
「でさ、物は相談なんだけど、私が教えてあげよっか？　ＩＳについて」
言いながら、三年生の女子はずずいっと一夏に身を寄せる。
この辺の件は原作にもあったことを思い出す。
女子からしてみれば、これをキッカケにお近づきになり、あわよくばと考えているんだろう。
もっとも、一夏には既に彼女がいてチャンスなんて随分前から存在しないが。
原作で箒はこれを遮った。
けれど、私は一夏の意思を尊重することにした。
もちろん、私もＩＳの知識については十二分に持っている。ただ、ＩＳ操縦経験は残念ながら一夏と大差ない。というか、代表候補生のような例外を除けば入学したばかりの新入生が何十時間もＩＳを動かせるわけがない。たとえ私が篠ノ之束の妹だとしてもだ。
だから、この場において三年生の先輩を頼るのは正しい選択だ。

しかし――

「すいません。先輩の厚意はありがたいんですけど、俺は箒に教えてもらいます」

一夏の視線がこちらに向けられ、次いで先輩の視線が向けられる。

「この子に？　でもこの子も一年生よね？　あなたとあまり変わらないと思うけど」

「大丈夫です。小さい頃からの付き合いですけど、すごく頭良いし、教え方も上手なんで。それに仲が良い相手の方が気兼ねなく勉強できますし」

「でも――」

「また機会があれば頼りにさせてもらいます。先輩もそろそろ忙しい時期だと思いますし、今は自分の方に専念してください」

人当たりの良い柔和な笑みを浮かべて言う一夏に三年生の女子は「た、確かに君の言うことも一理あるわね」と言って、帰っていった。

……その頬がほんのりと赤らんでいたのを私は見逃さなかった。

流石は主人公。流石はイケメン。

いくら相手に下心があったとはいえ、勘違いさせるようなことを言ったわけでもないのにいとも簡単に落としてしまうとは。

「しかし、良かったのか？」

「なにが？」

「評価してくれているのは嬉しいが、私も天才というわけではない。あの先輩に教わった方が多少勝率は上がるのではないか？」

そう言うと、一夏は何故か苦笑する。

別に客観的事実を述べただけで、おかしなことを言ったつもりはないのだが……。

「ほんと、箒は昔からそういうところが変わってないなぁ」

「む。それはどういう意味だ？」

意味がわからず問うてみると、一夏はこちらに顔を近づけ、私以外には聞き取れない声で言った。

「異性からの好意に鈍いところ」

「なっ!?」

思わずガタッと音を立てて、立ち上がってしまった。

それも仕方のないことで、あの原作で唐変木かつ朴念仁と称された織斑一夏に鈍感だと言われたのだから。

そんな訳はない。伊達にヒロイン力を高めていたわけではないのだ。

確かに一夏の好意に気づかなかったが、あれはまだ男としての意識が強かっただけで中学の時は……うん？

そういえば、告白されることは何度もあったが、気づいたことってなかったような

……。大体人づてに聞いていたような気がしなくもない。

「俺がさっき先輩の提案を断ったのは箒と一緒に居られる時間が減るからだ。もちろんさっき先輩に言ったことも本心だけど、一番の理由はやっぱそれだな。折角再会できて、俺の願いも叶ったんだ。出来る限り、俺は箒と二人きりの時間を作りたいし、大切にしたい」

「……」

ま、またこいつという奴はぁぁぁぁっ。

何故、こうも歯の浮くようなセリフを真剣な表情で言い切れるっ!?　少しは恥じらうべきだろう!?

それにいくら四人用の席を二人で使っているから近くに女子がいないとはいえ、どこで誰が聞き耳を立てているかもわからない現状でそんな発言ができるのか。

もしバレでもしたら、望み通りの二人きりの時間が侵害されるやもしれないのだぞ!?

あ、いや、別に私は二人きりの時間を心から望んでいるわけではないがっ!!

……ただ、ここまで言われて嬉しくないのかと問われれば、当然嬉しいと答えるし、ヒロイン冥利につきる。

後は時と場合を考えて……い、いや、やはり時と場合を考えて言われても私には余裕を持って返事をできる気がしない。恥ずかしすぎて訳の分からないことを口走る可能

性すらある。
　というか、本当に一夏に羞恥心というものはあるのか？
「じゃあ、そういうことだから。よろしく頼むぜ、箒」
　……うん。あれだ。昨日の告白で一夏は色々振り切ったに違いない。これは色々振り切った人間の表情だ。とても清々しく晴れやかなオーラを放っている。
「……んんっ。う、うむ。任せろ」
　ともかく、私にどこまで出来るかわからないが、やれるだけやってみよう。
　こ、好意はともかく、期待には応えなければならないからなっ。

結論から言うと、一夏は凄かった。
何が凄いって？　大体全部が、だ。
ＩＳの知識は原作よりあるとわかっていたが、どうやら参考書を渡されてから二ヶ月足らずでほぼ全て暗記したらしい。
本人曰く、『スタート地点が違うから、死ぬ程勉強した』そうだ。
これで教えられそうなことはなにもない……とはならないのが真のヒロインたる私だ。
ＩＳの知識だけに関しては一年生の範囲は既に勉強済みだ。なんなら二年生の範囲にも手を伸ばそうとしている。
何故これだけ勉強できたのか。
それは入学自体、私の意思に関係なく確定コースだったので、ちょっとだけズルして他の皆よりも先に教科書を貰っていたからだ。
幸い、ＩＳ学園は学年ごとに新しい教科書を買うという小中学校システムではなかったので出来るかはともかく、やろうと思えばどんどん先まで勉強できるが、どれだけ知識を身につけても、経験が補えるわけではない。
訓練機の貸出申請を出して、一度だけ使えたのが唯一の救いだろうか。

一夏が天才肌とはいえ、一度経験しているのといないのでは大きく変わってくる。
やれるだけの最善を尽くし、迎えた約束の日。
「専用機。まだ来ないな」
「当日には、という話だったが、随分もたついているものだ」
白々しく、そんな事を口にする。
試合開始の刻限まで迫っているが、一夏のＩＳが今もなお届いていない。
だが、私は全く心配していない。試合開始までには必ず届くと知っているからだ。
「いざとなったら訓練機で――」
「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」
わざわざ一夏の名前を三度も呼んだのは第三アリーナ・Ａピットに駆け足でやってきた山田先生だ。
一応この世界において年上に当たる人物に大変失礼だが、毎度本気で転びそうな気がして、割と心配している。
「山田先生、落ち着いてください。まず、深呼吸を」
「は、はいっ」
何度か深呼吸をすることで山田先生も少しだけ落ち着きを見せる。
「それで、どうされたんですか？」

「と、届きましたっ！　織斑くんの専用ＩＳが！」
「本当ですか⁉　一体どこに――」
「――焦るな、馬鹿者」
　山田先生に詰め寄る一夏を、颯爽と現れた千冬さんが引き離す。
「千冬姉……」
　一夏がそう呼んだ瞬間、弾けるような打撃音が響く。音は軽いが威力は洒落にならない。あれだけは喰らいたくないものだ。
「織斑先生と呼べ。少しは学習しろ」
「……すみません、織斑先生」
「それでいい。……さて、今しがた焦るなとは言ったが、少し急げ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」
「はい！」
　力強く頷く一夏。
　ピットの搬入口が開くと、私達はそちらに視線をやる。
　そこには眩しいほどの純白を纏ったＩＳが、その装甲を開放して操縦者を待つように鎮座していた。
「これが……」

「はい！　織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」
「織斑、すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」
「はい」
　返事をした後、一夏がこちらに視線を向けて、頷く。
　実戦でのフォーマットとフィッティングについては昨日の段階で私が一夏に可能性の話として告げていたことだ。本来ならそんな無茶で無謀な真似はしないのだが、ここは物語として紡がれた世界。起こることはいつだって非常識極まる。
　一夏がＩＳに触れた後、千冬さんが指示しながら、ＩＳを装着していく。
　完全にＩＳを装着した一夏を見て……少し羨ましいと思った。
　専用機とか普通にかっこいいし、自分だけの機体とかロマンしかない。
　原作の通りなら私が行動を起こさなくても、いずれ姉さんが渡しにくるとは思うが……。
　なんだか誕生日が待ち遠しいなんて、転生する前の小学生の頃を思い出す。一夏同様、代表候補生でもない自分がＩＳを簡単に貰えることに対して申し訳ないと思う反面、その瞬間を待っている私もいる。
　よし。来たる日の為にも周囲から専用機を持つに相応しい人間と思ってもらえるよ

うに精進を――

と、そうこう考えている内に一夏の準備が終わったようだ。

……んんっ。ここは一つ。ここまで共に励んできた者として声援の一つも送るのが道理というものだろう。

そ、それにか、彼女でもあるわけだからなっ。ここで何も言わずに見送るというのは、私の求めるヒロイン像にはない。

「一夏」

「どうした？　箒」

「相手は代表候補生だ。絶対に勝て、とは言わん。全力を出しきれ」

「ああ。この試合が終わったら立ち上がる余力も残ってないぐらいの気持ちでやるぜ」

「その意気だ。一夏、お前の勇姿を私に見せてくれ」

「おう、任せとけ！」

一夏は力強くそう答えるとピットゲートへと進み、ゲート開放とともにアリーナへ向けて発進した。

さて、後は運がどう転ぶかだな。一夏がすべきこと、私ができること。やるべきことは全てやった。元々の実力差が大きいのだから、この一週間。どれだけの手を尽くしても覆ることはない。縮めるのが限度だ。

だから後は運にかける。原作であそこまでいけたんだから勝てると見込んでいるものの、やはり運を味方につけないことには――

「篠ノ之」

「はい。なんでしょうか？　織斑先生」

思考に耽っていると、突然千冬さんが私を呼んだ。

そちらを見れば、何故か千冬さんが愉しげな笑みを浮かべて、私を手招きしていた。

……な、なんだ、この嫌な感覚は。

今までに千冬さんがあんな愉しげな笑みを浮かべていたのは、私が幼い頃に将来的には千冬さんに匹敵する剣士になるかもしれないと父が口にした時ぐらいだ。あの時は獲物を見つけた獣のそれに近いものを感じたが、今はそれよりもマズいと本能が訴えている。

しかし、この場を離れることは出来ない。千冬さんから逃げたら後が怖いし、そもそも一夏の試合を観るにはここが一番いい。モニター越しでもリアルタイムのものだし。

おそるおそる千冬さんの方に向かう。もちろん、千冬さんに気取られないように普通に歩いたつもりではあるが、千冬さんが気づかないかはわからない。

「あの、それで何か――」

「何かあったのか、と訊きたいのは私の方だ。随分、織斑と親しげだったな？」

「……幼馴染みなら当然だと思いますが。それが久しぶりに再会する相手であれば尚更」
「とぼけるな、篠ノ之。これまでどれだけ私が織斑を見てきたと思っている。お前だけなら確証は持てないが、織斑は別だ。あいつの考えていることぐらい、手に取るようにわかる」
「へぇぇ。流石は姉弟さんですねー」
　ふふん、と鼻を鳴らす千冬さんだったが、それを聞いて純粋に感心する山田先生の様子にはっとしたように咳払いをした。
「んんっ。ともかく、詳しいことは『後で』聞かせてもらうとしよう。お前も、今は織斑の試合が気になるだろう」
　気にならないわけがない。この一週間ともに頑張ってきたのだ。それに原作と比べ、一夏がどれほど強くなっているかを知る機会でもあるのだから。
　緊張感を誤魔化すために一度深呼吸をしたのち、一夏とセシリアの試合に意識を向けた。

結論から言うと、試合の結果は一夏の辛勝で幕を閉じた。

そもそも代表候補生に勝ったのだから大金星と言ってもいいのだろうが、如何せん本人が勝ったという割に浮かない顔をしていた。

聞けば、『せっかく箒に手伝ってもらったのに上手く戦えなかった』とのこと。

操縦時間四時間弱。一次移行（ファースト・シフト）前のＩＳ。おまけに武装はブレード一つ。

一次移行（ファースト・シフト）は試合中に出来たと言っても、終盤に差し掛かってから。これだけのハンデを背負った状態で勝ってもなお、そう言えるなら一夏は強くなれる。元々ポテンシャルは高いのだから、向上心さえあればどんどん強くなれるだろう。

そ、それはそれとして、だ。

この一週間。一夏はよく頑張ったと思う。本人は納得していないが、結果も良かった。

だ、だから……うむ。
「ど、どうだ。一夏。く、首は痛くないか?」
「お、おう。全然大丈夫っていうか、正直……最高」
ご褒美に膝枕ぐらいはあげてもいいだろう。
言い出したのは一夏……。ではなく私の方だ。
あれだけ頑張って結果を出した人間に何の報酬もないのは可哀想だ。一応今回の試合の勝者にはクラス代表の地位が与えられるが、これは一夏が望んでいないので報酬とは言えない。
そこで一夏の努力を称え、個人的に何かしてあげようと考えた結果、膝枕でもしてあげようという考えに至った。
キスならともかく、膝枕ぐらいなら少し気恥ずかしい程度なので問題ない。
はたして、こんな行為で一夏の努力が報われるか怪しいところだったが――
「……その顔を見るに、この行為はお前にとって十分価値があるようだな」
「まぁ……一応、こういうのに憧れてたしな」
照れ臭そうに頬をかく一夏。
好きな人に膝枕をしてもらうことが嬉しいというのは理解できる。……といっても、概念的な意味でだが。

「……現実、なんだよな」
「どうした、突然」
「なんかさ。今までずっと好きで、心の底から会いたいと思ってた幼馴染みと再会して、勢いで告白して、ＯＫもらえて、恋人っぽいことしてもらえてるのが俺にとって都合が良すぎる気がしたんだ」
「だから現実感がない……か」
　男でＩＳを動かした方が現実感がないと思うが……確かに一夏視点でみればうまくいきすぎて、実は夢なんじゃないかと疑いたくもなるだろう。
「では、夢にしてしまうか？　明日から私たちはまた幼馴染に戻る事に――」
「それは絶対に嫌だっ！」
　がばっと勢い良く体を起こし、力強く拒絶する一夏。少しからかうだけのつもりだったが、一夏にとっては笑えない冗談だったようだ。
「そう必死になるな。私とて自分の言動には責任を持つ。お前自身が恋仲を解消したいとでも言わない限り、有耶無耶にはしないぞ」
　いくら勢いで押し切られた節があるにしても、一夏の好意を受け止めたことに違いはないわけだしな。
「……箒。今の冗談は心臓に悪いって」

「すまない。つい、な」
弟を相手にしているような感覚が強かった時の名残か、時々一夏をからかいたくなる。
昔はそれで一夏が拗ねるものだから、余計にからかいたくなったものだが……今になって思えば一夏が拗ねていたのは好きな相手に男として見られていないと感じていたからかもしれない。
好きな相手から異性として見られていないというのは深刻な問題なのだろう。だからこそ、今の一夏があるという解釈も出来なくはないが。
私が仕切り直しの意味をかねて、ぽんぽんと自分の太腿を叩くと一夏は先程と同じように――
「っ!?」
――頭を乗せようとした瞬間、ドアをノックする音で互いに弾かれるように離れた。
オートロック式なのでこの部屋の人間以外勝手に入れるわけはないというのに、お互い初々しさがあることもあってか、殆ど反射的に離れた。
「……」
「……えーと、俺の方が近いし、俺が出るよ」
そう言うと、一夏は小さく溜息をついて、ドアの方に向かう。

残念がらなくても、膝枕ぐらい頼まれればやってやるというのに。
そう思っていると訪問者の元へ向かった一夏がこちらに戻ってきた。
「誰だったのだ?」
「織斑……ああ、別に今はいいか。千冬ねえが、箒に話があるってさ」
「千冬さんが?」
……いや待て。そういえばそんなことを言っていたな。
試合が終わっても何も言ってこなかったので、今日の話ではないと勝手に思っていた。
「わかった。もしかしたら長話になるやもしれん。その時は私を待たずに寝るのだぞ。ただでさえ、今日は疲労が蓄積しているだろうしな」
「ああ」
多分消灯時間過ぎても待っているに違いない。大方『寝付きが悪い』だのと説得力のない言い訳をするのだろう。しょうがないやつだと思わせつつも、そういうところは少し好感が持てる。ナチュラルイケメンとはこのことか。
……もちろん、時と場合によっては強引にでも寝かしつけるが。
「織斑先生。話とは」
「立ち話で済ませるには少し長くなる。寮長室に行くぞ」

千冬さんはそう言うと私の返事も聞かずに歩き出す。
この人もこの人で所々強引すぎるというか、傍若無人とも取られかねない言動をする時がある。そういう意味では類は友を呼ぶという言葉を体現しているとも言える。
……間違っても本人には絶対言わないし、仄めかしもしないが。

寮長室に入るとそこは魔境だった……ということもなく、家事全般が苦手である千冬さんとは思えないほど部屋は綺麗さを保っていた。
服を脱ぎ散らかしてるわけでもないし、ゴミ袋がその辺に転がっているわけでもない。目につくといえば、机の上に置かれている未開封のビール缶とつまみぐらいだ。未開封であることを考えれば、これも私を呼びに来る前に準備したものだろう。

「誰が突然訪ねてくるかわからん以上、こまめに掃除はしている。この部屋は職務上私の部屋になっているだけだからな」

部屋を見回す私に千冬さんが答える。

公私混同はしない、と豪語する千冬さんらしい回答だ。多分一夏なら『じゃあ、自分の部屋も掃除してくれよ』と言いそうだ。

「さて、ここなら私以外に聞くものはいない。腹を割って話し合うか。箒」

どかっと腰を下ろすと千冬さんは手に取った缶ビールを開ける。

私を名前で呼んだ、ということは今から『教師』でなく、『一夏の姉』という一個人として話をするという千冬さんなりの合図なのだろう。

「率直に聞く。一夏と付き合っているのか？」

「はい。つい先日、一夏からの告白を受け、交際することになりました」

隠すつもりも、意味もないので正直に答えた。

「なるほど。やはり予想通りか……少し意外ではあるがな」

「意外、ですか？」

「一夏は昔から幼いなりにお前を意識し、アピールしていただろう？　お前はそれをどうにも気づいてない……というより、そも一夏を異性として見ていない節があったからな。私はてっきり年上にしか興味がないとばかり思っていた」

「未熟だっただけです。私はあれも一夏なりの接し方としか思っていませんでしたから」

　こればかりは元男だったから、など説明できようはずもないのでそう答えた。

　そういうものか、と微妙に納得してなさそうな千冬さんだったが、缶ビールを一息に飲むとふぅと一つ息を吐いた。相変わらず、この人は一挙手一投足が男らしいというか、なんというか。

「まぁ、なにはともあれ、一夏の恋が成就したのなら姉として喜ばしいところだ。一夏が好きになった相手をどうこう言うつもりはなかったが、私も出来ればお前が良いと思っていた」

「私が、ですか?」

「意外か?」

「ええ、まあ」

　千冬さんの事だから、てっきり私が一夏に相応しいか見定めてやろうと言い出すのではないかと勘ぐっていたのだが、まさか千冬さんが私に対してそう思ってくれていたとは。

「家事全般が得意で教養がある。ＩＳはともかく、生身での実力は高く、性格も良い。さらに容姿も整っているとくれば、仮に私が男でも嫁に欲しいくらいには能力が高いぞ

？」

「あ、ありがとうございます」

こんなストレートに褒められると少し照れる。

しかもあの千冬さんが手放しに褒めてくれるのだから尚更。以前は最後にオチがあったのに今回はないようだ。

「鈍感なのが玉に瑕だが、付き合ってしまえば関係ないだろう」

……と思っていた矢先。姉弟揃って同じことを言い放った。

こ、これではまるで私が原作の一夏のようではないか。ち、違う！　断じて違うぞ!?

決して私が鈍感だったわけではなく、そもそもあの一夏があれだけ早い段階で好意を抱いてくれているという発想がなかっただけだ！

「それで？　一夏とはどこまでした？　まさかこの短期間で既に済ませたわけではないだろう？」

「済ませ……？」

「おいおい、男と女が一つの部屋ですることなんて一つしかないだろう？」

「っ……な、な、ななな何を言っているんですか!?」

これには思わず叫んでしまった。

あっけらかんと言ってのけるものだから、一瞬何を言っているのかわからなかった。

　千冬さんの言うところの『済ませた』というのはつまりそういうことだろう。
「うるさいぞ。いくら防音されているといっても、全く外に聞こえないわけではない。あまり騒ぐと他の教員からクレームが来る」
「す、すみません」
「第一、そこまで驚くことでもないだろう？　お前がお遊びで一夏と付き合っていない限り、いずれはすることになる。それが在学中か、卒業後は知らんがな」
「そ、それは、そう、ですが……きょ、教師として生徒の不純異性交遊は許容してはいけないのでは？」
「当たり前だ。だが、さっき言ったろう？私は『姉』として聞いているだけだ。仮にお前が『毎日している』と答えたとしても罰を与えることはしない。……まぁ、その反応を見るにまだ済ませていないようだが」
「あ、当たり前ですっ。学生である以前に交際した男女がたった一週間でせ、性交渉をするなど……は、早すぎますっ」
　これは価値観の違いによって有りという人もいるかもしれないが、私は早すぎると思っている。第一、お遊びでないにしても、私が一夏を愛しているかというのも怪しいところだというのに性交渉など早すぎるどころか、遥か彼方にある。
「そういうものか？　まあいい。する時はくれぐれもバレないようにな。私個人が気づ

いた場合には見逃してやるが他の生徒に露呈してクレームが来た場合は教師として其れ相応の対処をしなければならない」

「で、ですから、そ、そういう心配は結構です」

というか、千冬さん個人が気づいている場合は見逃すって、それはそれでいいのだろうか？　公私混同しているような気がする。

「話はそれだけ……と言いたいところだが、ついでに一つだけ聞いておきたいことがある」

そう前置きすると、さっきまでニヤニヤしていた千冬さんの表情が真剣なものになる。

「あいつは……束はどうだ？」

「……所在まではわかりませんが、定期的に連絡が来るので元気なのは確かです。それと、今のところは大人しくしているつもりみたいです」

あれだけの監視下に置かれていたのにその隙間を縫うように姉さんはありとあらゆる手段で私に連絡を寄越していた。内容は日常的なやりとりだったが、あれはあれで姉さんなりの気遣いだったのだと思う。だからといって傍若無人なのに変わりはないが。

「……そうか。今のところは、か。願わくば今後一切厄介ごとを起こさずにいてもらいたいところだが……そうはいくまい」

私と一夏がここにいる以上、事は必ず起こる。おそらくほぼ全ての事件が原作通りに起こるはずだ。

止めようと思ったこともある……が、止めようと思って止められるのなら苦労はしない。

姉さんが天才であり天災である所以。迷惑なことこの上ない……時々変な物を送ってくるし。

「まぁ、あいつのことは任せろ。あまり度が過ぎるようなら力ずくで捩じ伏せる」

「……出来れば死なない程度でお願いします」

「殺して死ぬようならあいつは成人する前に死んでいるさ」

「……」

どこか誇らしげに語る千冬さんに私はそれ以上追及することができなかった。

幼馴染と幼馴染

「……」

「え、えーと、二人とも、麦茶飲むか？　飲むよな？　ちょっと淹れてくるっ」

そう言うと一夏はそそくさと逃げるようにこの場を離れた。

離れたい、と考えてしまうのも無理はない。私も第三者の立場なら何か適当な理由をつけてこの場を離れようと考えるだろう。

というのも、かれこれ十分ほど、こうして無言の時間が続いているからだ。

私の向かいに座る訪問者――凰鈴音は私を見るばかりで一向に口を開かない。

よもや、いきなりＩＳ学園に来たその足で私たちの部屋に突撃してくるとは思ってもみなかった。原作よりも早い邂逅というわけだ。

『ちょっと話があるんだけど』。

部屋に来て開口一番、鈴はそう言ったのだからなにか話（おそらく一夏関連）があるのだと思っているのだが、私の予想に反して、室内を静寂が支配している。

私から話を切り出すべきかと考えたのだが、一応鈴が話したいことがわかっていないので、私の憶測だけで話を切り出せないでいた。

「ほ、箒、鈴。麦茶持って来たぞ。そ、それとお茶請けに羊羹もあるからなっ！」
「ああ、ありがとう。一夏」
「……ありがと」
「っ。お、おう！　ま、まぁ、俺のことは気にせず、話してくれていいからな？　お、俺はＩＳの勉強もあるし」
そう言うと、学習机の方に向かい、勉強を始めた。
……確か鈴が来る前に予習・復習は終わらせていたはずだが……追及しないほうがいいだろう。
「……やっぱりさ」
「？」
「……あんたも、その、一夏のこと、す、好き、なの？」
ようやく鈴の口から出た言葉は予想していた内の一つだ。
鈴がそう思う気持ちはわかる。
原作で一夏と出会った人間は敵対している人間を除いてほぼ全員が好意を抱いていた。そして小学生の時はまだしも、この学園に来てからも理由はどうであれ、既に一夏に対して好意を抱いている人間は多く存在する。
そしてそれは近しい者たちも当然と考える。

だが。

「ああ。確かに私は一夏が好きだ」

「やっぱり……」

「好きだが……これは愛している、という意味ではない。なんというか……友愛のようなものだ」

恋愛感情はない……はずだ。正直あまり自信が無い。

というのも、この数週間でちょっと一夏の印象が変わりつつある。

私の精神がほぼ女になっていること、作品としてではなく、一人の人間として織斑一夏を見ていることなど色々な変化があってか、告白されて以降、一夏を異性として意識するようになっていた。

……だから、将来的に一夏を好きでないという保証はない。いや、別に好きになるのは悪いことではない。ヒロインもしてはいいことだ。ただ、告白されたほうが最終的にベタ惚れって、それはそれで負けた気がする。

「そ、そうなの？　私はてっきりあんたも一夏を好きなんだと……」

意外そうに呟く鈴。そしてその表情はさっきよりも明るく見えた。

……その表情を察するに『両想いじゃないならまだ可能性はある』と思っているのだろう。

だが、そう上手い話があるわけではない。

「確かに私は一夏を愛しているわけではない……が、凰鈴音。お前の予想はあながちハズレでもない。お前がここを訪ねてきた段階でお前が最も危惧していたこと。願わくばそうあって欲しくないと思ったことは紛れもなく現実だ」

心を鬼にしても告げなければならないことはある。何事も初めのうちが肝心なのだ。後回しにすればするほど収拾がつかなくなる。

「……ふーん。じゃあ、一夏は私との賭けに勝ったってワケね」

「……賭け？」

「そ。二十歳までに篠ノ之箒と恋人になれたら一夏の勝ち。なれなかったら私の勝ちってね。……まさか、こんな偶然が重なって、早々に決着がつくなんて思わなかったけど」

この世界の流れを知らない人間にしてみれば、一夏と私が恋人になるまでの出来事は偶然に偶然が重なった奇跡的な出来事のようにも思えるかもしれない……いや、現実なら奇跡か。

となると、一夏にとってはかなり分の悪い賭けだったはずだ。それでもなおその賭けに乗ったということは、一夏なりの覚悟の決め方だったのかもしれない。ラノベ主人公の決断力は計り知れないものがあるからな。一夏も例外ではない。

しかし……むぅ。あずかり知らぬこととはいえ、私まで負けた気がするのは何故だ。

「あー、残念っ！　一夏がＩＳ学園に入学するって聞いた時は私にもチャンスあるかと思ったんだけど、そう上手い話はないかー」
「私が言うのもなんだが、随分サッパリしているな」
　正直、泣かれるのも覚悟していたのだが……拍子抜けだ。
「そりゃ一回振られてるわけだしね。その時に出すものは出してるわよ。今回で完全にチャンスも無くなったわけだし、むしろ後腐れ無くなってスッキリしたわよ」
　から元気……ではないようだな。
「だからこの話は終わり。でさ、他にも聞きたいことがあるんだけど」
「質問ばかりだな」
「別にいいでしょ？　減るもんじゃないし」
「……まぁ、何も言わないよりはマシだな」
　どちらかといえば、という前置きがつくが。
　だが、当の鈴はそんなことなど気にもせず、さっきとは打って変わって興味津々の眼差しでこちらを見て、問いかけてくる。
「中学の時さ、一夏が結構あんたの話をしてたのよ」
「私の話？　たとえば？」
　それには興味がある。

自分のこととはいえ、一夏が惚れた相手の話をするなんて原作では聞けなかったものだ。

「ぶっちゃけ自慢話よ」

「……」

思わず、勉強している（フリをして聞き耳を立てている）一夏の背中を睨んだ。

好きな相手のことを褒めたいのはわからなくはない。

しかし、そこはもっと言い方というものがあるだろう！　聞かされる側からすれば赤の他人なんだぞ！

「聞かされる身としてはうんざりしてたんだけど……」

「当然だな」

それも好きな相手が他の知らない女の話を楽しそうにするのだ。正直、キレても拗ねても恨んでも仕方ないと思う。

「でも、自慢話の中でも気になることがあったわけ。信憑性が高いのは……剣道の腕前が千冬さんクラスとか」

「……それは流石に言い過ぎだと思うぞ」

そもそも本気で戦ったことがない。年の差を考えると当然のことだ。小学生と高校生だしな。

「でも、千冬さんは合ってるって言ってたわよ？」
それを聞いて、椅子からずり落ちかけた。
あ、あの人……ひょっとしてあの時から私と本気で試合をする機会を虎視眈々と狙っているのではないか？
可能性は否定できない。昔、千冬さんが『お前と束が逆だったらな』とボヤいていたのを聞いたことがある。もちろん、聞いていないことにした。
「買い被りだ。千冬さんはあのブリュンヒルデ。それでなくとも身体能力が化け物じみているのは互いに知るところだろう」
「それは知ってるわ。だから、興味あるわけ……っ！」
「そうか。だが、こんなことではわからないだろう？」
「……あんたも千冬さんも同じくらい化け物じみてるってのはわかったわ」
鈴が引き攣った表情でそう答えた。
鈴はおそらく拳を顔の前で寸止めするなりなんなりで事の真偽を確かめようとしたことだと思う。表情が引き攣っているのは、鈴が椅子から立ち上がった段階で私は手刀を喉元に当てているからだろう。
化け物じみた身体能力、というのは否定しない。これは神が与えたものだ。本来の篠ノ之箒よりも努力し、元のポテンシャルも高いとくれば当然化け物じみた身体能力に

……ん？　これなら千冬さんと同等の可能性もなくはないのか？
「今のがホントのこととなると……頭が良いのも、家事全般がこなせるのも、趣味が多彩なのもホント？」
「……嘘か本当かで言えば、本当だな」
　褒め殺されているみたいで気恥ずかしいが、その為の努力はしてきた。それもこれも最強のメインヒロインとして、決してメインヒロインが先に出てきただけの女だの、作者の趣味だの、はては他ヒロインの引き立て役だのと言われない為に努力は惜しまなかった。
「ふーん。なるほど。一夏が好きになるのも少しは納得できるわね。少しね」
「う、うむ」
　後腐れがなくなった、という割には少ししか納得しないのか……気持ちは理解できるが、負けず嫌いなやつめ。
「まあいいわ。恋愛（この戦い）は負けたけど、ＩＳは負けないから。あんたにも、もちろん一夏にもね！」
「ふっ。面白い。今はまだお前の方が強いが、私もすぐに追いつく……いや、追い抜いてやろう」
「ああっ！　やるからには俺も絶対に負けないぜ！」

びしっと指をさして高らかに宣言する鈴に私と一夏も乗る。

最初はどうなるかと思ったが、これはいい感じに話を締める事が出来たのではなかろうか。

そう思って、ほっと胸を撫で下ろしていると――

「ところであんた達って付き合ってどのくらい？　どっちから告白した……かはわかるとして、同棲状態だけど、どこまでいったの？」

――鈴の好奇心に任せた質問連打が再開した。

それを聞いて、鈴の中で完全に未練が断ち切られていることに安堵しつつ、鈴の質問に触発された一夏の大胆発言アンド行動に私はドギマギする羽目になった。

……釈然としない。

翌日。

案の定、クラス内は転校生――鈴の話で持ちきりだった。

ただ、原作であった鈴が一夏に宣戦布告をしにくるということはなく、朝のＳＨＲで千冬さんが鈴は国家代表候補生であり、専用機持ちであること。二組のクラス代表になったことを簡潔に述べたことですぐに噂話は鳴りを潜めた。

噂というのは謎だからこそ盛り上がるものだ。

その点、千冬さんはさっさと真実を伝え、クラスメイトの興味を一気に削いだ。おかげで放課後にはまるで朝の盛り上がりがなかったかのように慣れつつある日常に戻っていた。手際の良いことだ。

まぁ、鈴が一夏と接点のある人物であると露呈するとまた再燃しそうな気もするが、今はそれよりも重要なことがある。

鈴は専用機持ちでクラス代表。そして一夏もクラス代表。

二週間後にはクラス対抗戦が待っている。その最大の敵となるのが鈴だ。

……もっとも、順当に行くと一回戦で当たる挙句、どこかのバカ姉のせいで無しになるのだが。

しかし、だからといって鍛錬を疎かにするわけにはいかない。それにどこかで私と一夏の関係を把握しているであろう姉さんがひょっとしたら乱入してこないかもしれな

い。可能性は限りなくゼロに近いが。

どうなるかはわからないので、ひとまずは強くなるために頑張ろう、という方針の下、先日紆余曲折を経て、友人となったセシリアに教えを請うていた。

勝敗以外はほぼ原作通りだったにも関わらず、なぜセシリアが一夏を好きにならなかったか。

実は私も知らない。翌日には一夏と私にこれまでの発言を謝罪し、友人として仲良くしていこうと言われた。

とても聞き辛かったが、一夏の事について聞いても『そんなに心配なさらなくても、大丈夫ですわよ？』と答えるだけだった。結果として全てが丸く収まったわけだが……なんというか、私が知らないところで話が進んでいるような気がしてならない。こういうのは普通ヒロイン（私たち）の役目のはずだが。

腑には落ちないものの、ものすごく嫌な予感がするのであまり突っ込まず、今はセシリアの下で一夏と共にＩＳの操作を教えてもらっている。

細かすぎるのが玉に瑕だが、寧ろそれだけ理解して実践しているということ。単に教え慣れていないだけで、流石は代表候補生というところだ。知識はともかく、操縦技術は素人レベルの身としては大変勉強になる。

「二組のクラス代表になられた方は一夏さんのご友人なのですか？　」

「ああ。小五から中二の途中までよく遊んでたんだ。まさか中国の代表候補生になってるとは思ってもみなかったけどな」
「……それに関してはお前ほどではないと思うがな」
仲が良かった相手が再会した時超絶エリートになっている、というのは確かに驚きだ。
しかし、一夏の場合は仲が良かった相手が今や誰もが知る有名人になっている、というわけだ。しかもあの織斑千冬の弟。結果を残そうと残すまいと歴史の教科書入りは確定だ。
一夏自身はまったくもって嬉しくないだろうが。
「まだ本国にいる時に噂を耳にしましたが、中国も第三世代型のＩＳの完成が近いと聞きました。この時期で転入、それが専用機持ちとなれば十中八九、一夏さんのご友人の専用機は中国の第三世代でしょう」
「それって、セシリアのブルー・ティアーズみたいな？」
「はい。趣旨は違いますが、なんらかの特殊兵装はある。とみていいでしょう」
むむ、と一夏が唸る。
「考えてもしかたあるまい。わからないのでは対策が立てられん。今は地道に努力あるのみだ」

私は私で知っているが、情報源を教えられないため、知らない風を装うしかない。そもそも、見えない砲弾を完璧に躱すとなるとそれこそ相手の攻撃パターンを把握するか、常に相手が予測できない動きをし続けるぐらいか。

「ですわね。僅差とは言え、このわたくしを倒すほどの素晴らしい才能を一夏さんはお持ちのようですが、まだ粗さが目立ちます。ですので、クラス対抗戦までにわたくし、セシリア・オルコットが完璧に仕上げて差し上げますわ！　も・ち・ろ・ん！　箒さんもご一緒に！」

「お、おう」

「よ、よろしく頼む」

目を輝かせるほどやる気満々のセシリアに思わずたじろいでしまう。

ま、まぁ、原作通りにいけば、これから先にはおよそ普通の学生生活とはいえない波乱が待ち構えているのだ。多少スパルタじみていても、未来の自分のためになると思えば寧ろ良いことだ。

私に関しては姉さんが作っているであろう専用機（強制イベント）が与えられるまでは訓練機。借りられる日も、使用できる時間も限られている。一夏に差をつけられないためにも精進しなければ。

そういえば、最近姉さんからの電話がないな。あの人なら私と一夏が交際を始めた瞬

間に連絡を寄越しそうなものだが。

……待てよ。これ、フラグではないだろうな。

『おめでとー！　でいいのかな。箒ちゃんに恋人が出来てお姉ちゃんは嬉しいような寂しいような、でもいっくんが相手だから気持ち的にはやっぱり嬉しいよ、箒ちゃん！』

フラグだった。

某騎士王には遥かに劣るが、私の直感は大概当たる。そして私の直感が働くときは、決まって姉さん関係の事だ。

『あれれ？　おーい、箒ちゃん？　聞こえてる？』

「聞こえてますよ。そしてありがとうございます。これで私も一夏も安泰なので、次は千冬さんと姉さんの番ですね」

冗談めかして言うと、電話の向こうからも笑い声が聞こえる。

『あははー、無理無理。私やちーちゃんに釣り合う男なんて未来永劫……は言い過ぎか

な。少なくとも、私たちが生きてるうちは現れないよ』
「天才の遺伝子は残さなくていいんですか？　ほら科学の発展のために」
『そりゃあ科学の発展には束さん並みの天才が必要だけど、束さんの子どもも束さん並みの天才である確率は低すぎるしねー。実験でも、どこの馬の骨ともわからないやつに抱かれるのなんて嫌だし。多分殺しちゃうよ？』
「……そうでしょうね」
　自分で言っておいてなんだが、やはり千冬さんや姉さんと付き合える人間というのがそもそも思いつかない。釣り合いが取れるかというのは考えない。そんな男は探す方が難しい。それこそ私のようにこの世界に転生した人間でもない限り、能力的な意味で釣り合いを取りに行くのは不可能だろう。
　だが、別に釣り合いが取れなければ付き合ってはいけないわけではない。ようは愛さえあればいいのだ。互いに愛があれば、周囲の評価など何の価値もないゴミだ。
『あり得ない話は置いておくとして、箒ちゃん。お祝いに欲しいものある？』
「祝いの品、ですか？　いえ、別に結婚したわけでもありませんし、片想いが成就したのは寧ろ一夏の方で――」
『まあまあ、細かいことは気にしちゃダメだよ。ほら、箒ちゃんは滅多にわがまま言わないんだし、こういう時こそお姉ちゃんにおねだりしなきゃ。大概のことは叶えられるよ

？』

「では、大人しくしていてください。素知らぬ顔でちょっかいを出すなんていうのは無しです」

割と真面目にそう言うと電話の向こうから口笛が聞こえた。……ああ、やっぱり。ちょっかいを出す気満々だったんだ、この人は。

「……では、どんなお願いならいいんですか？」

『箒ちゃん。私は『あの』篠ノ之束だよ？　私にお願いするとすれば、それはもう真っ先に思い浮かぶことがあるんじゃない？』

「……だから、さっき釘を刺しましたよね？」

『そうなんだけどね。箒ちゃん。私が言いたいことわかってて言ってるでしょ？』

「ええ、まあ」

即答すると、電話の向こうで『箒ちゃんが反抗期だぁ～、くーちゃん慰めて～』という声が聞こえてきた。この程度で反抗期なんて言っていたら、原作の箒なら絶縁状態なのではなかろうか。

……さて、軽くからかって姉さんのせいで溜まった鬱憤を晴らしたところで、話を戻そう。

「姉さん」

『つーん……』

拗ねてる。全く、本当に私相手だと精神年齢が酷いことになるな。

「なにを拗ねてるんですか。これから真面目に話そうとしているのに」

『ふーんだ。まるで私がいつも人に迷惑かけてるみたいな言い方してさ。箒ちゃんは私のこと本当は嫌いなんでしょ？』

事実でしょうに。第一、定期的に釘を刺しておかないとなにをしでかすかわかったものではないし。

しかし、これは面倒なことになった。

姉さんが臍を曲げると、口八丁だけで機嫌を直すのは難しい。昔は神輿を担ぐだけで良かったのだが、それももう効かない。

となると……あれをやるしかないか。

正直嫌だ。録音とかされていそうだし、なにより、今私は寮の部屋にいる。つまり、一夏がいる。勉強中でも、話し声は聞こえるはずだ。一夏に聞かれるのも、恥ずかしい。

だが……今は他に方法が思いつかない。

覚悟を決め、軽く咳払いをする。

深呼吸をして――

「……束お姉ちゃん」

『……へ？　今なんて……』

間の抜けた声が電話の向こうから聞こえた。そして一夏も驚いたように勢いよく振り返った。ええい、見るな。私とて恥ずかしいのだ！

「私が東お姉ちゃんのことを嫌いになるわけないよ。だって、今も昔も私は東お姉ちゃんの事が大好きだから」

私の持ちうる全力の妹パワーを総動員し、昔姉さんが呟いた『箒ちゃんに東お姉ちゃん大好き！　って言って欲しいな』を再現する。

恥ずかしさで死にたくなった。

一夏はとんでもないものを見たかのような顔で固まっているし、電話の向こうからはなにも聞こえない。

静寂に耐えかねて、声を掛けようとしたその時、雑音が入り、別の人間が出た。

『急遽お電話をお借りしています。申し訳ありません、箒さま。東さまが幸せそうな顔で意識を失われていますので、また後日連絡をするということでよろしいでしょうか？』

電話に出たのはクロエさん。

姉さんがくーちゃんと呼ぶ人物で、この人も原作後半で関わってくる重要な人物だ。

原作では事実上敵対関係の人物だが、私はクロエさんと敵対するつもりはない。

会うのは月に一回程度だったが、何度か（政府にバレないように）顔を合わせていたのでそこそこ仲良くさせてもらっている。

あちらは私のことをさま付けで呼ぶ。別に呼び捨てで良いと言ったのだが、頑なにさま付けだ。それなのに私がさん付けで呼ぶと呼び捨てで良いと言う。……この話は長くなりそうなので省略するが。

「ええ、構いません。ところでクロエさん。姉さんは私になにをプレゼントしようとしていたんですか？」

『私程度では束さまのお考えを全て理解できるわけではありませんが、箒さま専用のＩＳを作られておりましたので、おそらくそれかと』

「そうですか。クロエさん、姉さんにはありがとう。と伝えておいてください」

『承りました。束さまもお喜びになるかと思います』

「この辺りで失礼します。クロエさんもお元気で」

『はい。では、失礼します』

クロエさんの言葉を聞いて、電話を切る。こちらが切らないとクロエさんも切らない。

……専用機か。原作通りなら現行のＩＳ全てを凌駕する第四世代のとんでもない機体だ。

それだけでも十分驚異的だが……姉さんがよりはっちゃけてもっと化け物じみたISになったらどうしよう。

チート性能は嬉しいが、それだけ高いスペックを誇るとなると扱うのも苦労しそうだから、願わくば原作通りの性能でいて欲しいところだ。

「な、なぁ、箒。さっきの――」

「それ以上言わない方が身のためだぞ、一夏。私とて手をあげるのは本意ではない。だから、何も言うな」

「お、おう……」

逆転→進展

クラス対抗戦第一試合。

対戦カードは原作通りに一夏ｖｓ鈴となっている。

原作通りでないとすれば、二人が喧嘩をしていないこと、ＩＳの訓練を十分に行えていることの二点。

前者はこの試合においてさして影響のないこと。もしかしたら原作では少し冷静さを欠いていたかもしれない線が否定できないものの、あくまでたらればの話だ。

後者は一夏が原作よりも強いという証拠であり、この試合に多大な影響を与えている。

知識は突然入学させられた人間にしてみれば、優秀も優秀。操縦技術もセシリアのおかげでどんどん上達している。結果として、千冬さんからの直接指導が無くなったものの、そこは原作知識を持つ私がいる。

鈴への秘策として『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を提案した。

この技術は決して高等テクニックではない。何せ、千冬さんが指導したとはいえ、ま

だ素人も素人の一夏が原作で使えたのだ。代表候補生のセシリアが使えないはずもなく、一緒にレクチャーを受けた。

なのでまたもや準備は万端。ここまで上手くいくとイレギュラーが起きた時が怖い。

周囲の関係性が変わったことを除いて、特に変化はないが、油断はできない。私という人間が存在する以上、原作通りには絶対に行かない。

……ＩＳ絡みの事件でイレギュラーが起きたりしないことを祈るばかりだ。

「箒さん？　随分と険しい表情をなさっていますが、なにか心配事でも？」

どうやら表情に出ていたらしい。

隣にいたセシリアが尋ねてくる。

素直に話すわけにもいかないので、別の事を話す。

「セシリアももう知っていると思うが、一夏はスロースターターのきらいがあるだろう？　あれが少し心配でな」

これは主人公としての性なのか、一夏はどうにもエンジンのかかりが遅い。最初のセシリアの試合はまだ慣れていなかったから仕方ないと思っていたが、そうではなかった。

模擬戦をすると、最初の方はキレが今ひとつなのだ。ここぞという時になるとフルスロットルになるのは間違いないが……癖が付いているようなので、不安要素になってい

る。
「そうですわね。このままだと一夏さんはかなり苦戦を強いられることになるでしょう。ただ……わたくしはそこまで心配することはないと思いますわ」
「なぜだ?」
言い切るセシリアに素朴な疑問をぶつける。
すると、セシリアはこちらを見て、きょとんとし、その後に笑みをこぼした。
「ふふっ、一夏さんが苦労された理由がなんとなくわかりましたわ。これでは確かに、しっかり言葉にして伝えなければなりませんね」
「……悪いが、そうしてくれ」
暗に鈍いと言われているような気もするが、わからないのだからしかたない。それに試合開始はもうすぐだ。一夏のスロースターターをどうにかする策があるなら、今するしかない。
「簡単なことですわ。———です」
そう言って、セシリアが耳打ちしてきたが……。
「……本当にそんなことでいいのか?」
尋ねる私の表情は怪訝なものだっただろう。
けれども、セシリアは力強く頷く。

「はい♪　一夏さんはきっといつも以上に張り切るはずですわ」
そう言って、セシリアは試合開始目前で集中している一夏の方へ行くよう促してくる。
……ここでセシリアが嘘をつくメリットはない。あるとすればセシリアが少し大袈裟な可能性だ。
しかし、だ。
仮に私がセシリアと同じ立場なら、似たような事を言う可能性は高い。というか、十中八九言う。
ならばやるしかあるまい。
ま、まぁ、なんだ。クラス代表を決める時とそう大差ない。
一度深呼吸をしてから、一夏の方へと早足で向かう。
「箒？　どうしたんだ？」
接近に気づいた一夏が私の方に向く。
「い、いや？　別に用というほどでもないのだがな。一夏が緊張しているのではないかと思っただけだ」
「少しはするさ。でも、それ以上に鈴との試合が楽しみなんだ。二人との訓練の成果も見せられるしな」

なんだ、この頼もしさは。模擬戦はともかく、実戦はまだ二度目だというのに既にこの空気に慣れている。これまで幾度となく経験してきたと言わんばかりだ。

……いや、そういえば一夏はここぞという時はあまり緊張しないタイプだったか。必ず成し遂げなければならない時は『体が動く』と昔言っていたな。

「それにさ。俺が緊張して頭の中が真っ白になるなんて、箒関連のことぐらいだと思うぞ」

あっけらかんと一夏は言ってのけた。

「……」

完全に油断していた私は一夏の言葉を理解するまでに数秒時間を要し――

「っ……?!?!?!」

理解した途端、頬が急速に熱を帯びていくのを感じ、思わず変な声が出そうになるのをなんとか噛み殺した。

「お、おまっ、お前なっ！　試合前の、この真剣な空気で、そんな事を言うやつがあるか!?」

「いや、なんか箒が緊張してたみたいだから、和ませようと思って」

「別に和ませなくていいっ！　というか、緊張とは別の意味で心拍数が上がったではないか！」

そもそもなぜこいつはあんな台詞を吐いた癖にけろっとしているのだ!?　あれは確実に言った方も恥ずかしくなるやつだぞ!?
「一夏！　だいたいお前というやつはだな！　少しは時と場合を考えろ！　この前も――」
『試合開始五分前です。選手はアリーナへ入場してください』
「わ、悪い、箒。俺そろそろ行ってくるから」
絶妙のタイミングで入場を促すアナウンスが流れた事で、一夏は脱兎のごとく逃げ去る。
おのれ……ことごとくタイミングの良いやつめ。
「本当にお二人は仲がよろしいのですね。羨ましく思いますわ」
「……否定はしないが、この状況では揶揄っているようにしか聞こえないぞ、セシリア」
「はい。実は少しだけ」
「……」

一夏が試合に向かった後、私とセシリアは管制室に向かい、千冬さんや山田先生とともに二人の試合を観戦していた。

内容でいえば試合は拮抗していた。

厳密にいえば、経験の差で鈴の方が上手く立ち回っているが、それはしかたのないこと。

むしろ、一夏はよく経験の差を補っていると思う。

「織斑くん、この一ヶ月で見違えるように上達しましたねー。オルコットさんの試合の時はまだ慣れてない感じがありましたけど、今はすごく堂々としてますね」

「周囲に恵まれているだけだ。それにまだまだ動きに粗が目立つ」

「き、厳しいですね、織斑先生」

「当然だ。……まぁ、ど素人だったことを考えれば、多少は評価してやらんこともないがな」

わかりにくいと思うが、これは千冬さんなりに一夏を褒めているし、それどころか褒められて少し喜んでいる。だが、それを指摘してはいけないし、揶揄うものなら照れ隠しになにをされるか――

「そんなこと言って、実は織斑先生も織斑くんの成長を喜んでるんじゃないですか？」
　あ。
「そんなことはない」
「またまたー、隠すことじゃ」
「山田先生。私も完璧な人間ではない。あまり煽り立てられるようでしたら、知らず識らずのうちに手が出てしまうかもしれない」
　暗に『それ以上言うなら強制的に口を封じる』と言っていた。
　山田先生は顔を青くしているが、忠告しているだけマシだろう。山田先生の言葉次第では忠告なんてしていなかっただろう。まぁ、そもそも手を出す方が問題なのだが、千冬さんは基本豪胆な人だが身内関係になるとかなり繊細になるので間違ってもネタにしてはいけない。褒めすぎるのもいけない。
　……まぁ、人間誰しもそういうところはある。
「そ、それはそうと！　織斑くん、さっきからなにかを狙っているようにも見えますね」
「そうだな。攻めあぐねているというより、隙ができるのを待っている」
　これ以上はマズいと判断した山田先生が一夏の話題に戻した。千冬さんもそれ以上追及する気はないようで山田先生の言葉に頷く。
「織斑にしてはらしくない戦い方だ。十中八九、誰かの入れ知恵だろう。なぁ、篠ノ之

？」

　誰か、と言っている割には私だと断定している。

「……わかっているなら聞かないでください。それに提案したのは私ですが、教えたのはセシリアです」

「そうだろうな。難易度の高い技ではないが、かといって素人が独学で覚えたり、教えたりできるほど簡単な技でもない。……どうだった、オルコット。織斑は上手くものにしていたか？」

「完全、とは言えませんが、成功率は極めて高いはずです。一夏さんは大変飲み込みが早い方でしたので」

　一夏の『瞬時加速』の成功率は八割弱。ここまでモノにできているのは、一夏の才能とセシリアの指導によるものだ。今のところ、実戦的な部分で私の出る幕はない。

「しかし、良い判断だな、篠ノ之。仮に私が短期間でも織斑に指導をするなら、最終的にはお前と同じように『瞬時加速』を覚えさせるつもりだった」

　実際、原作ではそうしていた。私はそれを知っているからこそ、提案したに過ぎないが、もちろんこれも言うわけにはいかないので他の理由で誤魔化す。

「い、いえ、私は過去の千冬さんの試合からヒントを得ただけですので……」

「いやはや、義姉として誇らしく思うぞ」

涼しい顔してとんでもない爆弾を放り込んできた――っ!!

「へ？　義姉？　それはどういう――」

「冗談！　冗談ですよね、織斑先生！　そういう冗談はよくありませんよ！　なんというか、こう、色んな人に！」

山田先生が食いつく前に即座に対応する。そしてすかさず千冬さんの方に詰め寄り、小声で訴える。

「織斑先生、正気ですかっ。セシリアはともかく、山田先生は私と一夏の関係を知らないんですよっ!?」

「隠すほどのことでもないだろう？」

「ひけらかすようなことでもありませんし、それにあの人に言ったら、どんなタイミングで失言するかわかったものではありませんっ」

「否定はせん。だが、全校生徒に知れ渡ったところでなにも問題は無いだろう。むしろ、一夏に他の女が下心を持ってすり寄ってこない分、お前も嬉しいだろう」

千冬さんの言い分は正しい。全校生徒に広がれば、一夏に言いよる人間はいなくなりはしないが、間違いなく減る。その事について私は嬉しいとも悲しいとも思わない。他のヒロインならいざ知らず、他の生徒なら勝つのは私だ（ドヤ顔）。

しかし……しかしだ。

もし全校生徒にバレれば、絶対に面倒な事になる。受け入れられるにせよ、嫌われるにせよ、なにかしらのアクションがあるはずだ。そうなればこの学園で私と一夏に安住の地は無くなる。寮？　交際している男女、それも将来すら見据えている男女を同室にするバカは身内以外いない。

やむを得ない。ここは――

「……一夏は私と二人きりの時間を大切にしたい、と言っていました。ですので、今の段階では一夏も周囲に知られるのは本意ではないと思います」

以前、一夏が私に告げた言葉を使う。

これはあくまで私の予想でしかない。もしかしたら、一夏は周囲に知られることを問題視していないかもしれないが、あの言葉を素直に解釈すればこうなる。

「……お前はどうだ？」

「私も同じです」

私も同意すると千冬さんは珍しく難しい顔をして考え込んでから、口を開く。

「……やはりわからん。だが、今付き合っているお前たちが言うのだからそうなのだろうな。あまり余計な気を回す必要はなさそうだな」

千冬さんなりに私たちに気を遣ってくれているらしい。それ自体は嬉しく思う。

……ただ、この不器用な気遣いを考えると、やはり一夏と私を同室にしたのは確信犯

なのではないかと勘ぐってしまう。もしそうなら、やはりブラコンを拗らせていると言わざるを得ない。

「あの……織斑先生？　さっきの義姉というのは……」

「すまない、山田先生。少々誤解を招く言い方になったが、私と篠ノ之は昔からの知り合い。家族ぐるみでの付き合いもある。だから、まあ、私としては義妹のようなもの、という事だ」

苦し紛れに聞こえなくもないが、筋は通っている。実際、事情を知っているセシリアはともかく、山田先生は興味深そうに頷いている。

「じゃあ、さっき篠ノ之さんが止めに入ったのは……」

「知っての通り、篠ノ之の姉は『あいつ』でな。昔から姉という存在に苦労させられていた。だから私が身近にいる年上として代わりになってやれればと思っているのだが、どうも姉というものに辟易しているらしい」

……訂正したいところだが、そうすると収拾がつかないので黙っておくことにした。

山田先生がやや憐憫のこもった眼差しでこちらを見てきているが。

千冬さんの放り込んだ爆弾を間一髪不発にさせたところで試合の方に意識を向けた瞬間。

凄まじい轟音と衝撃が響いた。

やはり来たか。

予想通りの結果だ。やはり止まらない。篠ノ之箒の言葉でも、姉さん(あの人)は止まらない。

良くも悪くもやると言ったらやる人だ。そこは尊敬できるし、自重して欲しいとも思う。

それはそれとして、妹として姉の尻拭いはせねばならない。非常に不本意であるし、この事件を解決するには篠ノ之箒が動くしかないのだ。

……絶対、一夏に怒られるから気は進まないが。

事は原作通りに片付いた。

今回は原作の解決方法のままであったため、原作よりも楽に……とはいかなかった。一人のイレギュラーがいても、必ずしも全てを変えられるわけではないというのは既に理解しているので、不平不満はない。

ないが――。

「……箒。俺が怒ってる理由。わかるよな？」

「……わかる」

――キャラが原作通りではないので、当然こうなる。

ベッドの上に座る一夏は怒り心頭だった。

千冬さんと入れ違いで保健室に入った私を見るや否や……

『そこに座ってくれ、箒』

と、有無を言わせない威圧感を放ちながら、ベッドの横にある椅子へ座るように促してきた。

私自身、解決の為に止むなしと判断していたとはいえ、客観的に見れば、百パーセント自分が悪いと知っていたので、文句を言わず、椅子に座った。決して怒り心頭の一夏が怖くて、苦し紛れの言い訳すら頭の中から消し飛んだわけではない。

「箒のことだから、あれが最善の策だと思って行動したんだと思う。結果的には大した被害もなく済んだから、そこは素直に箒に感謝したい……けど、その為にあんな無茶な

真似をしたことは許せない。いくら箒が強くても、ＩＳの攻撃なんて喰らったらひとたまりもないんだぞ」

「……」

返す言葉もない。

私にとっては原作という前提があっての行動でも、側から見れば、無謀極まり無い行動。

第三者には勇猛果敢な行動に見えるかもしれないが、親しい人間。一夏たちは肝を冷やしたに違いない。

体を張るような事になったのはこれが初めてだったから、甘く考えていた。反省しなければ。

「だから俺としては、箒にはちょっとした罰が必要だと思う」

「今回の件は私に非がある。好きにしてくれていい」

「そっか。じゃあ遠慮なく」

すっと一夏の手が眼前まで伸びてくる。

半ば反射的に目を瞑ると、僅かに遅れて額に軽い衝撃と小さな痛みが走る。

どうやらデコピンをされたらしい。結構強めに。

「これで終わり」

「……いいのか？　こんなもので」
「ああ。箒の無茶な行動は許せなかったけど、それもそもそも俺がもっと頼り甲斐のある男だったら、箒もあんなことしなかったのに、って思ったんだ。だから、俺ももっと強くならないと、ってことでこれでおしまい」
そう言うと、さっきとは打って変わって一夏は朗らかに笑ってみせる。
まったく……一夏自身には非があるどころか、褒められるところしかないというのに。
「そういえば、一夏。クラス対抗戦の事だが、今回の事件で今年は中止だそうだ」
「あー、やっぱりそうなるか。なんとなく予想はついてたけど」
残念そうに呟く。
一夏自身、気合いを入れて臨んだイベントだったわけなのだし、これまでの頑張りを考えると落胆してしまうのも無理はない。鈴ともかなり接戦だったのに決着がつかなかったわけだし。
……ま、まぁ、試合自体に白黒はつかなかったし、対抗戦自体中止にはなったが、無人機との闘いを考慮すると大会に優勝するよりも難易度が高いものをクリアしたわけだ。
それならセシリアの時と同様。ご褒美があって然るべきだろう。

だ、だが……うむ。

前と同じ膝枕では芸がない。それに膝枕はあれ以降何度かしたが、同居生活を経て、多少の肉体的接触では動じなくなっていた。流石は私。

ヒロインに恥じらいは必要だ。それは同意する。

だが、あくまで適度な恥じらい。過度な恥じらいは照れ隠しというフィルターを作り、誤解を招く。うっかり手を出してしまうこともあるだろう。

人によってはそれもギャップ萌えになるかもしれないが、私は色々な意味で鍛えられたヒロイン！　そんなことをするわけにはいかない。何故か？　一夏の顔が壁にめり込みかねないからな！

よって、私が取るべき行動は一つ！

「一夏。外を見てみろ」

「ん？　なんかあるのか？」

言われるがまま、一夏は外を向いた。

当然、その隙を見逃す私ではない。

すかさず立ち上がり、一夏を抱きしめた。

「ほ、箒!?　急にどうしたんだ……？」

露骨に慌てる一夏。

ふふっ、以前の私ならば一夏と同じような反応をしていたが、今の私は違う。ハグ程度なら私が心を乱すことはない。

「試合は中途半端に終わってしまったが、一夏はよく頑張った。十分に褒められることだと思ってな。これは私なりの褒め方だ」

そう言ってから、さらに頭も撫でる。

一夏は「お、おう。ありがとう……」と言って抱きしめ返してきたきり、無言になった。

私からも何も言わないため、静寂が保健室を支配する。

恋人同士とはいえ、普通は無言の空間は気まずいはずだが、これが不思議と――

「やっほー、一夏！　怪我の具合は……．あ」

「……」

「え、えーと、ま、また日を改めまーす……」

勢いよく開かれた扉がすっと閉められた。

方向的に私は訪問者の方を見れなかったが、十中八九鈴だろう。

どんな顔をしていたのかは想像に難くない。さぞかしバツの悪そうな顔に違いない。

……私としたことが判断を誤った。寮の部屋ならいざ知らず、保健室ではノックをせずに入ってくる人もいる。偶々訪れたのが鈴だから良かったものの、他の生徒なら大騒

動に発展するところだった。
「あー……一夏？　ひとまず今はこの辺りでやめておくか」
「そう、だな」
続きは一夏が部屋に戻ってからにしよう……別に卑猥な意味ではない。

「お引っ越しです、篠ノ之さん」
私は失念していた。
本来なら一夏との同棲を終えるのが、今日だったということを。
「部屋の調整がついたので、篠ノ之さんには今日から別の人と同居してもらいます」
「はい……意外と早いんですね」

「実は部屋の調整自体はもう少し早い段階で済んでいたんですけど、織斑先生がクラス対抗戦が近いからそれが終わってからにって。移動するのは篠ノ之さんですから、私は問題ないと思ったんですけど……」
「そ、そうですか……」
　あ、あの人……また強引な方法を……。それまでの間にあわよくば一夏と私が、とか考えていそうだ。交際が始まってからそんなに経っていないのにどうしてそこまで関係を深めさせようとするのか。千冬さんに限って、ネットに転がっているような統計データは信じないと思うが……。
「それじゃあ、私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう」
「ちょ、ちょっと待ってください。それって今すぐでないとダメなんですか？」
　と、ここで一夏が待ったをかけた。
　原作とは真逆だ。私ではなく、一夏が私の引っ越しを抗議するとは。
「それは、まあ、そうですね。いつまでも年頃の男女が同室で生活をするというのは問題がありますし、お互い異性の目が気になってくつろげないでしょう？」
「そ、それは……そうかもしれませんけど……でも、箒以外にまた別の人が来るなら、俺は箒の方が……」
「ああー、そういうことですか。それなら安心してください。ちゃんと織斑くん一人用

の部屋ですから。他の子よりも部屋は広く使えますし」
苦し紛れに放った言葉も粉砕され、一夏はがくりと肩を落とし、ちらっとこちらを見る。
うっ……そんな目で私を見るな。見られても残念だが、私にはどうすることもできん。
それにもう少ししたら一応男子が来る。ここで駄々をこねても意味はない。
ただ――。
「山田先生。好意はありがたいのですが、移動の準備は一夏に手伝ってもらいます。ですので、大丈夫です」
「えーと、私はそれでも構いませんけど……その、篠ノ之さんは女の子ですし、男の子に見られて恥ずかしいものとかあるでしょう？」
「大丈夫です。そういったもの以外を一夏に頼みますので」
流石に私も一夏に自分の下着を持たれているのは恥ずかしいが、一夏とした方が効率はいいだろう。それに一夏と話しながら準備もできるしな。
「そうですか。じゃあ、鍵は渡しておきますね」
そう言って、山田先生は私に新しい部屋の鍵を渡すと、部屋を出て行く。
一夏と話をしながら、部屋を移動するための準備を進めていく。

恋人兼ルームメイトとして生活をしていた時間は一ヶ月弱だったが、お互いに良いペースで心の距離を縮めながら生活をしていたような気がする。
これも相手が織斑一夏だからか、単に私と一夏の相性がいいのか。それとも両方か。
一般的な恋人同士がどれくらいのペースで関係を進展させているのかわからないが、いいペースだとは思う。
現に、こうして準備を手伝ってくれている一夏はさっきああ言った割にてきぱき動いているし、
「しかし、意外だったな。まさか、一夏が私が部屋から出て行くのに反対というのは。最初は男女が同室は問題がある、と言っていたというのに」
実際、気心が知れた仲でも男女が同室で住むのは大いに問題はあるが、まさか一夏からそんな言葉が出てくるとは思ってもいなかった私は完全に虚をつかれたわけだ。
「最初はもし箒に変なところ見せて嫌われるのとか嫌だったし、それに……」
「それに……なんだ？」
「い、いや、なんでもない！」
「なんでもなくはないだろう？」
なにかあるが言えないという感じの言い方だったぞ。
「ほ、ほら、俺ってあの時まだ箒に告白する勇気が無かったのに、いきなり同室はハード

ル高すぎるなって思ったって話」
「本当にそうか……？」
「お、おう！」
　なんか誤魔化しているような気もするが、これ以上つつくと最初の告白の時のような展開になってしまいそうな気がするので追及するのをやめておこう。
「ま、まぁ、最初はどうなるかわからなかったけど、ルームメイトが箒で良かったよ。なんていうか、擬似新婚生活みたいだった……って言うのは、ちょっと大袈裟か」
「そうだな。少し気が早いぞ、一夏。新婚までいくにはまだまだ私たちは日も経験も浅い」
　とはいえ私も何度か、結婚したらこういうやり取りをするんだろうな、と思う時はあったので強く否定はできない。
　まさか一夏も同じことを考えているとは思わなかったが。
「日も経験も浅い、か。だったら――」
「？　どうした、一……夏？」
　不自然に切られた言葉に違和感を感じて振り向いた次の瞬間、頬に何かが触れた。
「これで一歩前進、なんてな」
「い、一夏……？　今、お前……」

「本当なら口にした方がいいけど、それは……その、俺にも理想みたいなものがあるから、今はほっぺにってことで」

照れ臭そうに一夏は言う。

私は一夏の言葉を頭の中で整理して、さっきの状況をよく思い出し、何があったのかを理解して――

「っっっっっ?!?!?!」

――ショートした。

意識を取り戻したのは朝の六時半のこと。ベッドの上で目を覚ました。

なし崩し的に移動するのが一日ズレたことで妙な誤解を招きかけた。

最強は最恐で最凶

？

転校生。それも一応は二人目の男子ーーシャルル・デュノアの登場。

白馬の王子様、あるいは貴公子と言っても差し支えない容貌を持つ存在は、年頃の乙女にとって、あまりに嬉しいサプライズだった。

失神する人間も出てくるのではないかというぐらい色めき立っていたクラスメイトたちも、今は完全に静まりかえっていた。

というのも、二人目の男子とともに現れたもう一人の転校生ーーラウラ・ボーデヴィッヒの言動が原因だった。

人懐っこい笑みを浮かべ、爽やかな挨拶をしたシャルルの傍ら、つまらなさそうな表情を浮かべ、軍人を彷彿とさせる立ち振る舞い。

彼女と唯一交流があり、全幅の信頼を置かれている千冬さんに挨拶を促されなければ、名前すら名乗らなかった可能性すらある。

それだけでも浮きそうだというのに、全身から放たれる冷たい空気が『お前たちと馴

れ合う気はない』というラウラの意思を如実に表していた。
そこまでならまだ『近寄り難い人間』という認識で済んだだろうが、いかんせんその後の行動が問題だ。
原作同様、一夏と目が合うやいなや、教壇を降りて、ビンタをかまそうとしたのだから。
原作ならいざ知らず、今の一夏が隠す気もない敵意に気づかない筈はないし、なにかされることをなんとなく察してはいたのだろう。ラウラの平手打ちに対して、腕を上げて防御する姿勢を取った。
ーーそして、それよりも先に私がラウラの腕を掴んだ。
今の一夏がどうであろうと、なにが起きるのか知っている以上、ラウラの横暴を放っておく理由にはならない。
振り上げた手をいきなり掴まれたことに驚いて、目を見開いたラウラだったが、すぐにこちらを睨みつけてきた。
まさに一触即発の状態。
結果として、原作よりも張り詰めた空気が教室を支配することになった。
「……なんの真似だ」
「それはこちらの台詞だ、ラウラ・ボーデヴィッヒ。お前のそれはなんの真似だ？」

わかりきっている質問。だが、はっきりさせる必要はある。
私の問いにラウラは鼻を鳴らし、剥き出しの敵意をこちらに向ける。
「貴様には関係あるまい。その手を離せ、さもなくば、貴様から」
「やってみろ。できるものならな」
ラウラの腕を掴む手に力を込めたその時。
静寂を破るようにぱんぱんと手を叩く音が教室に響き、私とラウラの視線がそちらに向く。
「篠ノ之、ボーデヴィッヒ。元気があってなによりだが、そこまでにしておけ。それ以上やるようなら、特別授業として、私が相手をしてやってもいいが……どうする?」
やや呆れ気味に言う千冬さん。こういう武闘派系教員によくある脅し文句……と思いたいが、目が割と本気だ。というか、口調とは裏腹に目が『早くやれ』と言わんばかりに危険な色が宿っている。
それを見た瞬間、悪寒が走る。本能が警鐘を鳴らしている。これ以上は折檻以前にこの人のやる気スイッチが入ると。
急いで手を離すと、「それでいい」と千冬さんが呟く。その声が少し落胆したように聞こえるのは気のせいだろう。気のせいであってくれ。
「篠ノ之……では貴様が……」

「？」

なんだ？　明らかにラウラの目の色が変わった。

『あの篠ノ之束の妹に無礼を働いてしまった』などと思う性格ではないだろうし。仮にそうだった場合、意地になって謝らないというタイプではない。

切り替えるようにラウラは瞑目した後、千冬さんの方に一礼してから、空いている席に向かっていった。

それを見届けて、私も自分の席に戻っていく。

私が直接関わった人間以外の影響や変化がほとんどないことはわかっていたことだが、やはり面倒なことになってしまったな。

あの反応が少し気になるが、あまり良い予感はしないな。

昼休み。

『屋上で昼飯食べようぜ』。

一夏発案のもと、私、セシリア、鈴、一夏、そしてシャルルの五人は屋上に集まり、軽く自己紹介をした後、昼食を摂っていた。

転校してきたばかりで右も左も分からないシャルルに同じ男子として、一夏なりに

色々と気を利かせているのだろう。

いつもよくいるメンツを誘ったのも、一日でも早く、シャルルがこの学園での生活に慣れるようにという配慮からに違いない。

気心の知れた相手の有無というのはかなり大きい。それは私もＩＳ学園に来るまでの転校生活で骨身に沁みて理解している。

その好意がプラスに働くかどうかは相手次第だが、少なくともシャルル相手には良い判断だ。

惜しむらくは、二人の転校してくる日が今日だと言うことがわからなかったことだ。

人の口に戸は立てられぬ、ということわざがあるように、転校生に関する情報は前日までになにかしら情報が流れてくるかと思っていたのだが、ＳＨＲを迎えるまで噂一つでなかった。流石はエリート校。先生方の口はかなり堅いらしい。

それは良いことだと思う。悩みも相談しやすいしな。

ただ、結果としてお弁当を渡すというヒロイン力が高いイベントを逃してしまった。それどころか、なぜか今日に限ってお弁当を作っていた一夏が私にお弁当を渡してきた。しかも、想像以上においしい。ヒロインかお前は。

いや、私とて手料理自体は小学生の頃から何度も振る舞っているし、お弁当を渡す機会も探せばいくらでもある。

とはいえ、だ。

それを渡すところを誰かに見られれば、十中八九大騒ぎになる。それはもう千冬さんを呼ばないと収拾がつかないレベルの。

では見られなければいいという話になるが、私たちを含め、一夏の周りに人がいないことなんてほとんどない。十秒もあれば、三人ぐらいは確実に近くにいるだろう。

実際にその光景を見た時、ヒロインたちが慌てて、実力行使、もしくは抜け駆けを図ろうとする気がわかった。

二、三日静観していたら、ある日突然「あ、この子、俺の彼女なんだ」とか言い出しそうな気がするのだ。

原作の一夏の鈍さを考慮するとそんなことが起きるわけはないと思うが、それはあくまで客観的に見ての判断。恋する乙女にしてみれば、年頃の近づく女は全て敵に見えてしまう。

原作の篠ノ之箒同様、一夏に告白されず、今も幼馴染のままだったら、私とて少なからず焦燥感は覚えていたかもしれない。こちらの一夏はどういうわけか鈍感ではないようだし、相手からの好意を無碍にしないはずだ。

……むぅ。やはりさっさとバラしてしまった方がいいような気がしてきた。騒ぎになるのは避けられないが、一夏に言い寄る人間はほぼいなくなるだろうし、一夏と

一緒にいて違和感や疑念を持たれることもないはずだ。
いや、別に危機感や焦燥感があるわけではなく、ただ、女子が一夏を囲っているのを見ると少しもやっとするというか……これが嫉妬というものなのだろうか。面倒くさい。
「……き。箒」
「……ん。なんだ、一夏」
「手が止まってたからなんかあったのかと思ってさ。ほら、今朝あんなこともあったし」
心配そうにこちらを見る一夏。いかん、皆といるというのに、少し考えに耽ってしまった。
「そういえば箒。あんた、転校生と揉めたらしいわね。なにがあったわけ？」
「揉めた、っていうのは、語弊があるな。箒はその転校生から俺を庇ってくれたんだよ。な、セシリア、シャルル」
「そう、ですわね。状況的にはそうだと思いますわ」
「あー、うん。僕にもそう見えたし、ボーデヴィッヒさんの反応的にもそうだと思うよ」
「状況的とか、反応的とか、回りくどいわね……あんた達は目撃者でしょうが」
なぜか歯切れの悪いセシリアとシャルルに鈴がツッコミをいれる。
「そうなのですが……その。わたくしには箒さんがいつボーデヴィッヒさんの後ろに

立っていたのかわかりませんの」
「そう、だね。僕もボーデヴィッヒさんの方はちゃんと見てたはずなんだけど、気づいたら箒が立ってたんだよね」
　二人がそう答えるとなぜか鈴は苦虫を噛み潰したような表情で「うわぁ」と呟いた。
　なんだ、その『聞かなきゃ良かった』的なリアクションは。
「誤解がないように言っておくが、私は普通に近づいただけだぞ」
　呼吸の間をつくというか、意識の間を縫うというか。隙を狙いはしたものの、瞬間移動したわけではない。
「まさか、その手の言い訳を千冬さん以外から聞くとは思わなかったわ」
　言い訳もなにも、事実なのだが……というか、千冬さんも千冬さんでそんなこと言ってるのか。しかも、全然言い訳になってない。
「普段の立ち振る舞いから只者ではないと思っていましたが、わたくしの想像を遥かに超えるば……んんっ。超人ぶりでしたので、驚きを隠せませんでしたわ」
「本当に見えなかったもんね……よかった。びっくりしたのは、僕だけじゃなかったんだね」
「俺や鈴みたいに千冬姉の化け物っぷりを見てないと驚くよな」
　一夏がそう言うと、共感するように鈴はうんうんと力強く頷く。

確かに千冬さんの化け物じみた動きは初見だと顎が外れそうになるぐらい驚く。しかし、それと同列に扱われるのは過大評価というか、遺憾というか。かなり鍛え上げたつもりではあるが、あくまで人の範疇に収まるものだぞ。

非難する意味も込めて、一夏にジト目を向けると、一夏が露骨に話題を逸らした。

「ま、まぁ、それはともかく、同じ男子同士、仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうし、協力してやっていこう。たった二ヶ月って言っても、俺の方が先に来てるわけだし、わからないことがあったらなんでも聞いてくれ」

「うん。頼りにさせてもらうね、一夏」

「って言っても、ＩＳに関しては俺も教えてもらってる身だから、偉そうなことは言えないけどな」

「一夏さんは頑張られていると思いますわよ。授業には普通についてこられているようですし。ＩＳの操縦技術についても、この短期間でかなり上達していますわ」

「そうそう。この間までＩＳの『あ』の字も知らなかったような人間にしては良い線いってると思うわよ」

二人の言う通り、一夏の知識や操縦技術の成長には目を見張るものがある。

模擬戦の勝率こそ鈴やセシリアより低いものの、二人が代表候補生であることを考慮すれば、当然のことだし、最近は徐々に上がってきている。

むしろ、模擬戦の戦績が一番悪い私こそもっと精進せねばなるまい。これから起こることを考えれば、強ければ強いほどいい。その分だけ、原作よりも良い結果に繋がる。黒幕（姉さん）がこちらに合わせてレベルを上げてきたりしなければ。

ない……と思いたいが、姉さんの性格からしてこちらが勝てるギリギリ、死ぬ気で頑張ればどうにかなるくらいのラインを攻めてきてもおかしくはない。姉さんはそういう人だ。

……もう姉さんをどうにかしてしまった方が早い気がしてきたな。私個人では無理かもしれんが、千冬さんもいればなんとかなるだろう。

しかし、そうなると、最悪殺し合いに発展するし、辺り一帯が焦土と化すかも……うん。これはあれだ。最後の手段にしよう。後、その時のために場所も考えておかなければなるまい。

「箒？　また眉間に皺寄ってるけど……もしかして、弁当不味いか？」

「まさか。どれもこれもおいしい。また腕を上げたな、一夏」

「おう。でも、早く箒に追いつきたいし、もっと頑張らないと」

「いつも言っているが、ほどほどにな。あまりうまくなられると私の立つ瀬がなくなる」

「了解。ほどほどに、な」

冗談ではなく、本当に。

一夏の場合、家庭環境を考えれば、家事が得意なのは良いことだ。千冬さんは千冬さんで完璧超人だが、家事スキルは皆無だし。

しかしながら、ヒロイン（彼女）としては主人公（彼氏）よりも家事はうまくありたいと思うわけで。

なので、ほどほどにとだけ言っておく。個人的に一夏の努力を否定したくもないし。

と、シャルルが不思議そうな表情でこちらを見ているのに気づいた。

「シャルル？　どうかしたか？」

「あ、ううん。別にどうかしたってほどでもないんだけど……二人の空気感？　っていうのかな。慣れてるっていうか、すごい自然な感じがしたっていうか。うまくは言えないんだけど……　そういうの良いなって思って」

うぅむ……私にはよくわからないが、セシリアは力強く頷いているし、鈴は複雑そうな表情を浮かべているので、おそらく周囲からそう見えているのだろう。

ちなみにいまいちピンときていない私とは対照的に一夏は照れ臭そうにしつつも、嬉しそうな表情を浮かべていた。

なんだろう。私一人だけ置き去りにされている感が否めない。

この疎外感。普通、一夏（主人公）が感じるものではないだろうか。解せん。

「驚いたよ。一夏もそうだけど、箒もここまで動かせるなんて。とても入学するまで触ったことがなかったとは思えないよ」
「そ、そうか？　この中で一番戦績が悪い手前、そう手放しに賞賛されると面映いな」
「それは仕方ないんじゃないかな？　箒以外はみんな専用機持ちだし、第二世代の訓練機でこの戦績ならむしろ誇るべきだよ」
　二人が転校してきて早五日。
　生来のコミュニケーション能力の高さか、はたまた処世術か、シャルルは早くもいつメン（私、一夏、セシリア、鈴）に馴染みつつあった。
　土曜日はアリーナが全開放されるということで、運良く訓練機を借りることができた私は、シャルルと模擬戦をした後、軽くレクチャーを受けていた。
「とはいえ、なにか直すべきところはあるだろう？　シャルルの目から見て、どこか修正したほうが良いところはあるか？」
「そうだね。これは所感だけど、箒は鋭すぎると思うんだよね」
「？」

「勘が良いっていうか、避けられる攻撃は全部避けようとしてない？　さっきの模擬戦でも僕が張った弾幕も全部避けようとしてたし」
「それはセシリアにも言われたな。かえって誘導しやすいと」
「仮に全部避けられるのなら確かに驚異的だけど、実際にはそういうわけにもいかないから、避けなくてもいいモノーダメージの少ない攻撃はあえて受けて、機を伺うのも一つの手じゃないかな。打鉄は実体シールドもあるから」
「シールドで受けて、間合いを詰めるか。一応理解してはいるが……どうにもな」
当然のことながら、ＩＳに乗るまでは盾を使うような試合をしたことがなかったし、受ける時は自分の得物だった。そのせいか、反射的に近接ブレードで受けようとしてしまう。
後々の事を考えるとそれで正しいかもしれないが、かといってそういう『癖』を残しておくのも良くはないか。
「あくまで参考程度にね。さっきも言ったけど基本的な操縦技術は高いし、僕たち代表候補生を除けば、頭一つ抜けてる。後は『慣れる』しかないよ」
「わかった。ありがとう、シャルル」
「どういたしまして」
一通りレクチャーを受けたところで、今度は射撃武装に関するレクチャーを受ける一

夏と交代する。
この間の無人機の一件以降、一夏のＩＳに関して学ぶ姿勢はより貪欲になった。苛烈と言ってもいい。放っておいたら、そのままアリーナのど真ん中で寝ていそうなほどだ。
あれはあれで必要なことだったのだが、私の行動の結果、一夏に無理を強いるような事になっているのなら、心苦しい。
「箒ー。この後、どうする？」
「わたくしたちで、よろしければお付き合いいたしますが」
「そうだな。返却までまだ時間もある、少し付き合ってーー」
と、その時、アリーナ内が急にざわめき始める。
来たか、そう思って、アリーナ内で注目されている張本人のいる方に視線を向ける。
その視線の先にいるのは、ドイツの第三世代型ＩＳーー『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏ったラウラ・ボーデヴィッヒ。
絡んでくるのなら、やはりこのタイミングか。
「セシリア、鈴。すまない、急用ができた」
そう断ってから、一夏を庇うようにこちらに向かってくるラウラの間に立ち、しっかりと見据える。

機体性能、操縦技術、ＩＳでの戦闘経験。
なにより向こうには一対一では無類の強さを誇る固有兵装『ＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）』がある。近接戦闘向きの機体である『打鉄』はあまりにも相性が悪い。
以上の要素を踏まえても、私がラウラに勝つ余地はない。戦いになるかも怪しいだろう。
だが、それは問題ではない。こと今回に限ってはＩＳ戦をする必要はない。一触即発の『空気』にしてしまえばいいだけだ。
後は向こうが一撃入れてくるかどうかだが……来るとわかっていれば、一撃くらいは私でもどうにでもなる。
「おい」
その時、ＩＳの開放回線（オープン・チャネル）で声が飛んでくる。相手は当然、ラウラだ。
「なんだ？　言っておくが、一夏に貴様の相手をしている暇はないぞ」
「そうか。では、そちらは日を改めるとしよう」
予想外にもラウラは呆気なく引き下がった。
絶対、『邪魔だ』とか『関係ない』とか言って、一夏に喧嘩を売るものと思っていた。
もしくは力づくで私を退かせるか。
いずれにしても、すんなり話を聞いてくれると思っていなかった。

「それよりも篠ノ之箒。貴様だ」
「……私？」
　思わぬ指名に僅かに反応が遅れる。
「見たところ、貴様が装着しているのは訓練機のようだな。専用機は持っていないのか？」
　敵意や悪意を感じない純粋な疑問。
　意図はわからないが、答えない理由もないので正直に答える。
「ああ。なにせ、ここに入学するまでＩＳに触れる機会がなかった。そんな人間に専用機など渡されるわけがないだろう」
「……なに？　貴様は『篠ノ之』だろう？」
「逆だ。私が『篠ノ之』だから、ＩＳに触れる機会はなかった」
　厳密には、私が強く望めば、姉さんが用意してくれた可能性はあるが、その後がどうなるかわからない手前、大人しく入学を待つほか無かった。
　パワードスーツとはいえ、私のような転生した人間からすれば、ロボットと似たようなものだ。憧れは当然ある。
　だが、そんなモノのために他人の人生を踏み躙りたくはないし、わざわざ原作知識があるのに、不確定要素増やしてどうするという話にもなる。

しかしながら、事情を知らないラウラは納得のいかない様子で嘆息する。
「教官のことと言い、貴様のことと言い……理解に苦しむな。この国の文化には」
「随分と私を買ってくれているのだな。嫌われているものとばかり思っていたが」
「好みの問題ではない。貴様は教官が認めた人間――いや、好敵手だ。相応の評価を下しているに過ぎん」
「そうか……ん？　待て。好敵手？」
なんだ、その不穏な単語は。あの人、ラウラに一体何を吹き込んだ!?
「貴様ならば、近い将来専用機も与えられるだろう。その時を楽しみにしている」
「そ、そうだな。ところでお前に聞きたいことが――」
「ああ、それと。織斑一夏に言伝だ。『私は貴様の存在を認めない』」
「ああ。わかった。伝える。だから、お前に千冬さんが一体なにを――」
「ではな」
不敵な笑みを浮かべて、その場を去っていくラウラ。
待て！　一方的に話すだけ話して、不吉な謎を残して去ろうとするんじゃない！
くっ、開放回線（オープン・チャネル）で声をかけても応答しない。本当に最初の頃はコミュニケーション難だな、ラウラは！
がくりと肩を落としていると、肩の辺りにポンと手を置かれる。

振り返ると一夏たちがなんとも言えない表情でこちらを見ていた。
そうか。開放回線（オープン・チャネル）で会話をしていたわけだから全部聞こえていたんだ。
「その……大変そうだね。一夏も、箒も」
「心中お察しいたしますわ」
「まぁ、うん。千冬さんなら言ってそうよね。ご愁傷様」
「あー、えっと。なんていうか、千冬姉がごめん」

超人≠化物

アリーナでの一幕があってから、私が真っ先に向かったのは職員室だった。
もちろん、目的は一つ。
ラウラの言葉の意味を問いただすため。
もちろん、手っ取り早いのはラウラ本人に尋ねること。しかし、マトモに答えてくれるかわからない上、恩人フィルター（謎解釈）が入っている可能性を考慮すると、発言者に聞くのが早いと考えた。
幸いなことに千冬さんは職員室にいたので、探す手間も省けた。
声をかけてみたところ、書類整理もひと段落つき、ちょうど休憩しようとしていたらしく、呼び出しに応じてくれた。
そして現在は生徒指導室に移動し、千冬さんを問い詰めていた。
千冬さん。生徒指導室。文字通り、鬼に金棒。
この組み合わせなら、まず盗み聞きしようとする輩はいないはずだ。私ならしない。
「それで。話とはなんだ？　いくつか、心当たりはあるが」
麦茶の入った紙コップを私と自分の前に置き、ソファーの上に腰を下ろしながら千冬

さんは言う。そこはかとなく、気分が良さそうに見えるのはなにか良いことでもあったのだろうか。
「ボーデヴィッヒのことです」
「ああ、そっちか」
　私がそう言うと、千冬さんはやや残念そうな表情を浮かべる。なぜだ？
　いくらか気を落としたように見えた千冬さんだが、すぐにいつもの様子に戻り、こちらに視線を向ける。
「そういえば、ボーデヴィッヒと一悶着あったそうだな」
「揉め事、と言うレベルではありませんでしたが……もう知っていたのですね」
「この学園の生徒は良くも悪くも口が軽い。結果、教員（私たち）の耳に届くのも早くて助かる。お前たちも気をつけておけよ」
　意味ありげに釘を刺してくる千冬さんだが、私にはさっぱり、これっぽっちもわからない。
「なにに対してかは敢えて聞きませんが、肝に銘じておきます」
「話が逸れたな。ボーデヴィッヒの件だったか。転入初日にあんなことがあったわけだ。因縁でもつけられたか？」
「一夏はつけられかけていました。私はどちらかといえば宣戦布告ですね」

「ほう。それはまた、随分と面白そうなことになっているな」
「なっていません。というか、宣戦布告を受けた原因は織斑先生にあるんですよ」
「私が？」
　千冬さんは皆目見当もつかなかったらしく、意外そうに疑問の声をあげる。
「織斑先生ーーいえ、この場は敢えて千冬さんと呼ばせてもらいます。ボーデヴィッヒになにを吹き込んだのですか？」
「人聞きの悪いことを言う。私がそんな意地の悪い人間に見えるか？」
「もちろん、思いません。ですが、ボーデヴィッヒが、千冬さんが私を『好敵手』だと言っていたと聞きました」
「ああ。その事か。確かにお前のことをボーデヴィッヒに話した。成長すれば、将来的に私に並ぶともな」
　問い詰めるまでもなく、千冬さんはあっけらかんと言ってのける。やはり確信犯か、この人。
「どうしてそんな無責任な事を言うんですか。おかげでボーデヴィッヒの中では私は千冬さんクラスのば……んんっ、超人扱いですよ」
　勢い余って口が滑りそうになったのを咳払いで誤魔化しつつ、千冬さんにそう伝えると、千冬さんは麦茶を一口飲んで、ふうと息を吐いた。

「嘘は言っていないのだから問題ないだろう。事実、お前は私や束（あの馬鹿）の予想通り、いやそれ以上に強くなった。現時点でお前の相手をできるのは私ぐらいのものだろう」

「『織斑千冬の相手が務まる篠ノ之箒（人間）』と『篠ノ之箒（私）の相手が務まる織斑千冬（人間）』ではかなり意味が変わってくると思いますが」

文字の上ではどちらを基準に考えるか程度の差だが、その実、前者と後者で意味は大きく異なると思っている。

前者の場合は善戦できても、勝ちも引き分けもない。どこまで食い下がれるかという意味。

後者の場合は、倒すないし、押さえ込めることができるという意味。

少なくとも、私は前者の認識だ。評価してくれていることは嬉しく思う反面、この学園で千冬さんと再会した時、改めてその強さを肌で感じた。この人には敵わないと。

「そう大差はない、と言っても伝わらんだろうな」

しかし、千冬さんは私の答えにやや納得がいっていないらしく、腕組みをして、なにやら考え込んでいる様子だ。

千冬さんが思案している間、私も出された麦茶を口にしつつ、千冬さんの言葉の意味について考える。

そうして無言の時間が数分。

静寂を破ったのは、千冬さんだった。
「篠ノ之、少し付き合え」
「どこに、ですか？」
「なに、ついて来ればわかる」
そう言って、ニヤリと笑った千冬さんを見て、私は背筋に冷たいものが走る感覚に襲われた。

「さて、始めるか」
スーツからジャージに着替え、私の前に立つ千冬さんは軽くストレッチをしながら、そう言った。
『ついてくればわかる』。
そう言われて連れてこられたのが柔道場。柔道部員に断りを入れた時点で嫌な予感

はしていた。

『動きやすい格好に着替えろ』と言われた時点で、こうなることはほぼ確定していた。

とはいえ、千冬さんなりに考えがあるのだろう。言われるがまま準備をしていたら、これだ。いくらなんでも突拍子がなさすぎる。

後、この人もこの人で、姉さんと同じく、一度決めたら梃子でも動かない。救いがあるとすれば、全ての行動が自分本位ではないこと。時と場合は選んでくれることだ。

姉さんの場合は、自分が最優先事項だから。自分本位だし、時も場合も選んでくれない。それで昔よりマシになったのだから、なおのこと始末が悪いわけだが。

「篠ノ之。古武術の方は？」

「一通りは。ただ、剣術よりは劣ります」

「他はどうだ？」

「五十歩百歩、と言ったところです」

「……まぁ、今回は良いだろう。教員が勝手に備品を壊すのはマズいだろうしな」

良い、と言った割には不満そうに見えるのはスルーしておいた方が良さそうだ。

実際、竹刀を持って立ち会えば、新品だろうが壊れる可能性が高い。なにより止め時を見失いかねない。

「ルールはどうします？」
「特にない。強いて言うなら、顔への攻撃は無しだ。目に見える怪我は、他の生徒に余計な誤解を生む。お前の場合、ボーデヴィッヒの件もある」
「そうですね」
転入初日の一件と今日のアリーナの一件を見た生徒から、ほぼ全生徒に『篠ノ之箒とラウラ・ボーデヴィッヒは仲が悪い』と知られたはずだ。
その翌日、私が顔などの見える場所に怪我をしている。と言うことになれば、ラウラが私に怪我をさせたなどと、ありもしない誤解が流れるかもしれない。
私としてもそれは避けたい。今後のコミュニケーションに影響が出る。
そして千冬さんの顔に怪我をした痕跡、などあろうものなら、別の意味でパニックが発生する。それも避けたい。
「それにお前の顔に傷をつけては、後で一夏（アレ）になにを言われるか、わかったものではない」
「仲違いの原因にならないよう、全力でお相手させていただきます」
「ああ、構わん。全力で来い」
互いに一礼し、構える。
試合開始の合図はない。千冬さんから仕掛けてくる様子もないあたり、

私の攻撃が試合開始の合図ということだろう。
それを理解した瞬間、私は畳を蹴り、正面から千冬さんへと仕掛ける。
下手な小細工は不要。正面からの正々堂々とした立ち会いこそ、最も有効な戦術である。
私はそれを姉さんから学んだ。
本当に強い者と相対する時は、全身全霊で正面からぶつかるのだと。
迷いなく、踏み込んだ勢いそのままに千冬さんの腹部へ拳打を放つ。
手加減抜きの一撃。並の人間なら即病院送りに出来るその一撃は、はたして千冬さんにダメージを与えていなかった。
いや、正しくは両手で受け止められていた。
「思い切りの良さ、踏み込み、体捌き、そして迷いのない真っ直ぐな良い一撃だった。よくここまで成長したな」
不敵に笑う千冬さん。褒められたことは素直に嬉しいが……
「実感はありませんね。こうも軽く受け止められてしまっては」
「そう見えるだけだ。本当に軽いなら、手すら使わん。少なくともお前の一撃は私に両手を使わせるだけの威力があった。嬉しいぞ。この実力の相手とやり合えるのは久しくてな」

千冬はニヤリと口角を上げる。それを見た瞬間、私はその場から飛び退く。
ああ、これはマズい。本能が警鐘を鳴らしている。今すぐ逃げろと。
「先に謝罪しておこう。篠ノ之、少しやり過ぎるかもしれん」
「……手遅れかもしれませんが、お手柔らかにお願いします」
およそ生徒に向けるべきではない表情と闘志を滾らせた瞳。
完全、とは言わないまでも、スイッチの入った千冬さんを見て、私はまるで他人事のように思う。
……さて、何分持つことやら。

「けほっ！　けほっ！……はぁ……はぁ……」
柔道場の畳に大の字に倒れ、天井を見上げる。
結論から言えば完敗。千冬さんへ有効打を与えられず、私は何発か良いのをもらってしまい、最後は背負い投げを受けて、敗北を喫した。
現役から退いた人間とは思えない動き。私の今出し得る全力でぶつかったが、予想通り、とても届く相手ではなかった。
「少し加減を間違えた。立てるか、篠ノ之」

「いえ……少し……このまま……休ませていただけると……」
息も絶え絶えになりながら、そう答える。
正直なところ、これだけ全力で動いたのは私も久しぶりだった。それにこれだけダメージをもらったことも。
「そうか。では、そのまま話を聞け」
そう言うと、千冬さんは私の横に腰を下ろす。
「篠ノ之。まずお前の能力だが、見立て通りだ。現時点でお前の相手をできるのは私しかいない。お互い万全でなかったにしても、私にそう何発も攻撃を入れられる人間はいない」
「ですが……擦り傷、のようなものでしょう……」
確かに当たりはしたが、どれも軽いか、ガードされている。殆どダメージはないはずだ。
「その擦り傷すら他の者では無理だと言っているんだ。少なくとも、お前は今、私たちに近い領域にいる」
「どう、でしょう……」
強くなった自負はある。小学生の頃から比べれば、千冬さんや姉さんに近づいているという確信もある。いずれは千冬さんや姉さんなみの強さになる可能性だって十分に

ある。そう思っていた。

だが、実際に闘った結果がこれだ。差は確実に縮まっているのだろが、近い、と言われても、いまいちピンと来ない。

「差があるのは事実。だが、それは私たちの差であるし、私たちだからこそ『差』などという言葉で片付けられる。他の生徒から見れば、お前も、私も、超人の部類だろう」

「では、大差がないというのは……」

「言葉の通りだ。他の生徒からすれば、お前の相手をするのも、私の相手をするのも変わらん。ボーデヴィッヒも含めてな」

「……織斑先生の言わんとしていることはわかりました。どういう意図でボーデヴィッヒに私のことを話したのかも。ですが、好敵手は言い過ぎだと思います」

「なに。そうなって欲しいという私の願望も込みだ。過ぎているのは当然だ」

不敵な笑みを浮かべてそう言う千冬さんに、私は顔を引き攣らせる。

確信犯だ、この人。これはラウラが誤解しているのではなく、千冬さんがはっきりと私を好敵手、またはそうなる人間だと話したのだと、理解した。

誤解でないなら、訂正のしようがない。

「しかし、いい運動になった。また機会があれば、付き合ってもらうぞ」

「ははは……機会があれば」

そんな機会が来ませんように。そう願いながら、私は一足先に更衣室に向かう千冬さんの背中を見送る。

「さて、どうしたものか」

感情にプラスかマイナスかの違いがあれど、原作と異なり、ラウラは私も標的としている。

ラウラの発言からして専用機を持っていない私と戦うつもりはないだろう。大まかな流れは変わらないはずだが……。

「箒！」

やや焦ったような声音で私の名前を呼び、こちらに向かって、走ってくる人物がいた。

「一夏か、どうした？」

「それはこっちの台詞だ！　千冬姉に話があるとか言って、先にあがったのに、俺たちが訓練終わった時には、千冬姉と箒が闘ってるってどういう状況なんだ!?」

倒れた私に血相を変えて詰め寄ってくる一夏。織斑先生ではなく、千冬姉と言っている辺り、相当に焦っているのがわかる。

一夏が言いたいことはわかる。私が逆でも同じ質問をしていた。

とはいえ、どう説明したものか。

「なんというか……成り行きでな」

「成り行きで千冬姉と闘わないでくれよっ！　その話を聞いた時、めちゃくちゃ焦ったし、千冬姉と試合が終わった後、倒れたまま動かないなんて言ってるから、マジで肝が冷えたんだからな!?」
「それは流石に心配し過ぎだ……というか、織斑先生がうっかり生徒を殺すような事をするわけないだろう」
　確かに手が出るのが早い千冬さんだが、そんな事で人を殺していたら、今頃刑務所の中にいるはずだ。
「それは……そうだけど、昔から加減するのが苦手な千冬姉のことだから、今の箒が相手じゃ絶対加減とかミスって、やり過ぎるだろって思って」
　一夏の言葉に千冬さんが『少し加減を間違えた』と言っていた事を思い出す。
　流石は弟だ。姉の特徴をよく把握している。
　そして、これは言わない方がいいだろう。一夏の性格からして、教師と生徒としてではなく、姉弟として千冬さんに説教しに行こうとするだろう。学園の外ならともかく、学園内では基本的に千冬さんは教師として振る舞おうとする。であれば、一夏の説教を素直に聞くとは思えないし、そうなれば二人の間に蟠りが出来てしまうかもしれない。
「まぁ、心配するな。少しこうしていたい気分だっただけで、立ち上がれなかったわけではーー」

とても疲れたし、体の節々も痛いが、立てないほどでもない。そう思って立ちあがろうとして……ぐらりと体が横に傾く。

倒れる。そう思った瞬間、私の体を一夏が受け止めていた。

「やっぱり大丈夫じゃないじゃねえか！」

「すまない。どうやら、自分が思っていた以上に疲れているらしい」

それだけではない。動かないうちはそうでもなかったが、動いた瞬間全身が悲鳴を上げた。

「本当に疲れてるだけか？　実は体中痛くて動かすのが辛いとかじゃないよな？」

疑問の篭った、それでいてどこか確信を持った眼差しで私の目を見ていた。

これは……適当に誤魔化せなさそうだ。

「体は痛い。当たり前だ。千冬さんの相手をしていたのだからな」

「やっぱりーー」

「だが、動けないほどではない。精々が全身筋肉痛になったくらいだ。これくらいどうということはない」

私の経験上、これくらいのダメージなら、少しの間動きは鈍くなるだろうが、二日もすれば元通りに動けるはずだ。

「そっか。わかった」

「ああ。だから、少しだけ肩を……きゃ」
肩を貸してくれ、そう言おうとした時、急に体が持ち上げられ、小さく悲鳴も上げてしまう。
そして、周囲から黄色い声が上がった。
それもしかたのないことで、一夏がしているのはお姫様抱っこ。
「い、一夏？　これはどういうことだ？　なぜ、私は抱きかかえられているんだ？」
「保健室に連れて行って、ちゃんと治療してもらう」
「そんな大袈裟な……こんなものは放っておいても」
「とりあえず、先生に診てもらう。放っておいていいかは、俺たちが決める事じゃないだろ」
一夏から感じる非難の視線。声音。圧力が言外に『拒否権はない』と訴えかけてきていた。
「う、うむ。わ、わかった。わかったから、その、この持ち方はなんとかならないか？　流石にこの状態で保健室まで行くのは、恥ずかしいのだが……」
今の時間、校内をうろついている生徒はそう多くないものの、保健室に行くまでの間に何人かとは出くわすだろう。
正直、ここにいる生徒に見られているだけでも羞恥心で爆発しそうなのに、他の生徒

に会うたび、あんなリアクションをされたら、私のメンタルが持たない。
「それもダメ。これが色んな意味で一番良いし、ついでに誤魔化そうとした罰だ。保健室に行くまで、大人しくこのまま運ばれてくれ」
怒った一夏には、私の嘆願は聞き届けられず、私はさながら映画のワンシーンのように周囲から黄色い声が上がる中、お姫様抱っこをされて、保健室へと連れて行かれた。
穴があったら入りたい、というのはまさにこの事を言うのだろう。その間、私は茹で蛸のようになっているであろう顔を手で覆う事しか出来なかった。
結果、大事ではなかったものの、一応三日程度は激しい運動を控えるよう言われ、一夏からも『ちゃんと見てるからな』と釘を刺された。
鈴とセシリア、そしてラウラによる模擬戦という名の喧嘩が勃発したのは、それから数日経った日のことだった。